
俺は女の子になったようです

甘党

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は女の子になったようです

【Nコード】

N4282R

【作者名】

甘党

【あらすじ】

河原高校1年の高峰舜はいわゆるフツの男子高校生。かなりの怠け者で男らしい性格の彼だが、ある日突然、女の子になってしまふ。さらに、神様と名乗る変態爺さんの怒りに触れてしまふ。男としての経歴をすべて女であった物として書き換えられてしまふ。

入学以来の親友、祐二との関係にも変化が見られ……

筋金入りの怠け者たちが送る、トラブル続き、でもものんびり学園生活ストーリー。

※本作はTSストーリーです。

序章（前書き）

いわゆる「フツーの高校生」の舜は帰り道、体の不調を感じながらも帰宅。湯船につかり疲れを癒しているとつい眠り込んでしまった。「ウボアアアアア!？」とう声と共にたたき起こされる舜。

腰を抜かす親父と鏡に映っていたのは、何故か女の子になっている自分の姿だった

序章

ある月曜日の朝、晴れ。目覚ましのベルが鳴る。

この部屋の主、高峰舜（たかみねしゅん）はそれを断腸の思いで止める。

「ちく、しょう・・・」

追い出されるように渋々ベッドから降りる。そう、今日は月曜日彼が一番嫌いな曜日

舜はこの辺ではある程度名のある進学校、河原高校に通っているいわゆる優等生ではあるが

そんなことはなく「だるい」が口癖の根っからの怠け者である。なのでまた学校に行かなければなくなる月曜日はいつにましてだるく、機嫌が悪い。しかし、なんだかんだいってしつかり

学校へ行っているのはもちろん世間体、将来を考えてである。

いつも通りパンを2枚焼きながら着替え、髪の毛をセット、占いを見ながらパンを食べる

さて、さそり座は・・・

「12位は、ごめんなさいさそり座のあなた。急な変化についていけずパニック・・・」

「うわ、なんのフラグだよ・・・」

またいっそうだるさが増し時間になったのでまた渋々と家を出る。

また、いつも通り

同じことの繰り返しの日々が始まる、はずだった。

いつも通り電車でおっさんらに揉まれ、自転車でのろのろ登校もちろん時間ギリ、またいつも通り階段のところで、

「おい舜、遅刻するぞ、あと1分40」

担任の原田（先生）が忠告する。

「おーっす」

おはようございますが普通だが面倒なので極力省略して余計なツコミ（挨拶しろ系統）を回避、あとは時間自分の経験、歩幅、やる気を考慮しこのまま歩いていけるかを計算する。

「やべ・・・」

ここは1階、我が教室は5階、走るほかなかった。走るのはもちろんだるいことだが遅刻すればペナルティの漢字書き取り、居残り、部活遅刻、ひとりでメニューこなし・・・

明らかに後者のほうが面倒である。ということで走る。舜はいつもこんな風に天秤にかけて物事を選択する筋金入りの怠け者なのだ。

「ま、間に合ったか？」

教室に滑り込むように入る、すると

「セーフだぜ、舜ちゃん」

長身、イケメン、茶髪気味の男がいう。こいつは木本祐二（きもとゆうじ）、まだ出会って1年も経っていないのだが親友と呼べる仲にある。みてくれは完璧なこの男、しかし若干のオタ傾向と下ネタ連発のせいでいろいろと損をしている哀れなやつだ。しかし女子からの人気は根強い・・・ある意味。

「今日も一段とだるそうだな」

「当たり前えだ、なぜなら今日は・・・」

わざと、タメを入れる。

『月曜日』

うん、やっぱりこいつは親友だ、心の友だ。祐二も舜に負けず劣らずの怠け者、宿題未提出者常連、週3回はある教師らへの謝罪という実績持ちだ。

チャイムが鳴る、朝のホームルームに備え席に着いた。

・・・・・・・

あつという間に放課後になった。なぜなら今日はテスト明けでほとんどの教科がテスト返却だったので、何もせず寝ていたからである。

「あーあ、部活か」

舜は陸上部に所属している。我が河原高校陸上部は県内でもトップ

レベルの強さを誇る名門である。が、そんなこと知ったことではない舜は休みの極端に少ない部活動に苦悩していた。

「おい、今日は部活ないんじゃないのか？」

頭を抱えている俺に祐二が話しかけてきた、どうやらつぶやきが聞こえたらしい。

「そうだ、そうだった！ やった！ うおお」

ガッツポーズをとる舜、これに勝るうれしい事は無い。

「じゃ、帰ろうぜ」

と、祐二。

「おう。」

珍しく満面の笑みで答えると2人でさっさと帰った。

電車から降りあとは家まで歩くだけになった。授業無し、部活無しのラッキーな日に舜は満足していた。今日も何も起こらずいつも通り終わるはずだったのだが、

「ん？ くっ・・・！」

突然めまいがして舜は道端に座り込んだ。どうしたんだろうか、まあ2月まで皆勤だったから疲れは溜まっているのかもしれないが・・・と考えているとめまいは治まった。

「ん、何なんだいったい・・・」

ということ、疲れているようなのでさっさと帰ろうとした。今までにない違和感を感じながら。

序章（後書き）

どうもです。作者の甘党です（＾▽＾）
最後まで読んで下さった方もそうでない方も、このページを開いて
下さったことにまず

感謝です。初投稿なのでダメなところばかりだと思ひますが
お付き合い願ひたいと思ひます。

変身？（前書き）

いわゆる「フツーの高校生」の舜は帰り道、体の不調を感じながらも帰宅。湯船につかり疲れを癒しているとつい眠り込んでしまった。「ウボアアアアア！？」とう声と共にたたき起こされる舜。

腰を抜かす親父と鏡に映っていたのは、何故か女の子になっている自分の姿だった。

変身？

「ただいまー 腹減ったー」

家に着いたのは、19時過ぎ、部活がなかったとはいえ、祐二とゲーセンでダラダラ過ごしていたら結局いつもと変わらぬ時間帯の帰宅となった。

「先に風呂入るか・・・」

家族たちはテレビを見てるか何かで舜の帰宅に気づいていないようだ。しかし既に風呂は沸いていたので入ってから夕食をとることにした。乱暴に服を脱ぎ湯船につかる。至福の時間であった。

「ああ・・・だりい・・・明日も学校、部活ありか。めまいのことでも言っただけもうか、嘘じゃないし。」

と、考えていると急に眠くなってきてしまった。

・・・あ、やべ。

・・・

「ウボアアアア!？」

突然、誰かが死体を発見したような声で叫ぶのが聞こえた。誰だ？ あ、親父か・・・しかしどうしたんだか・・・

「つか、俺寝てたのか・・・おいどうしたんだ親父。」

とりあえず気にかけてみるが、親父は

「おい、母さん、ттттた、大変だ、風呂場に「女の子」がいるぞ!」

は? と思い 舜は立ち上がり

「親父、酔ってるのか・・・つか幻覚見るとかどんだけ酔ってん・・・!？」

開きっぱなしの浴室のドアの向こうにある鏡に俺?は映っていた。しかし・・・

映っていたのは、丸みを帯びた身体、きゅっとしまったクビレ、肩にかかるほどの髪……どこからどう見ても女の子……裸の。「な、何だよ……これ……」

目が覚めた。

「ああ、なんだ、夢か、あははは。さあてゴハンを食べるぞお」なぜかベッドの上にいることはスルーして、1階に向かう舜。リニングには家族がいる。

「あら、起きたみたいね」

「おお、今日は、カレーか」

母はこれをスルーし

「あなたいったい誰？ それとも本当に舜なの？」

「おいおい、母さんは酒は飲まないはずじゃ」

あれ、会話が夢の続きっぽいんですが……

「うーん。言い方からしてどうやらほんとに舜みたいだけど……

まあ これを見なさい」

手鏡が向けられる。映っていたのは目を疑う光景。

「へ？ あ……」

夢じゃなかったんかい と軽く突っ込みを入れる。なんでこんな無駄に冷静なんだよ、俺。

「あれ、母さん、俺は女の子だったっけ？」

「まさか、ちゃんと、ついてい……」

「ああ、もういい」

とだけ言って素早く脱衣場へ。とりあえず脱ぐ。まあ確認のため。「あ……ははは」

言葉にできない。鏡に映ったのはさっきと同じく明らかに女性の身体、しかもなかなかの好スタイル……ってオイ つかやべーよ、これはマズいぞ、うん。「落ち着け俺」と言い聞かせる。

とりあえず服着て、戻ろう、うん。

「俺、女の子だわ」

と、とりあえず言ってみる。

「あら、やけに冷静じゃない」

「まあね。そんなことより、俺これからどうすりゃいいんだろ。元に戻れんのかな・・・」

「いいんじゃないか？そのままで」と親父。

「はあ？ ふざけんなよ！ 俺は嫌だぞこんなの」
まてまて、と親父は手を前に出す。

「いや、なんだ、なかなかいい身体つきだったぞ？ はちきれんばかりの・・・ゲフンゲフン」

・・・危ねえ・・・この親父は危ねえ・・・
と女性の本能？がそう言っている。

「とりあえず、しばらくはそのまんまなんだろう？ 原因なんかそのうちわかる訳なんだから、今はこれからどうやって生活するかを考えるべきじゃねえか？」

珍しく正論。そうするほかない。

「だな、じゃあ・・・」

その後、明日の学校についてや、服（特にインナー）とかあまり触れたくない所も話し合った。

服はとりあえず今までの男物を着て、詳しいことは追々母と相談することになった。

「さあ、とりあえず寝るか・・・」

「舜、久しぶりにお父さんと寝ないか？」
「断る」

部屋のドアを閉め、イス、机などで軽くバリーケードを組み、布団にもぐりこんだ。

「これからどうなるんだ・・・？」
明日からの生活が不安で眠れなかった。

変身？（後書き）

どうも、作者です。

非常に無理矢理な展開ですね W W W

次回からは面白くします！

・ ・ たぶん。

俺はAだったようです。(前書き)

ある日突然女の子になってしまった高校生の舜の物語。
しかし元男子として気になるのはやっぱり??

俺はAだったようです。

ピピピピピ

目覚ましのベルが鳴る。

「・・・・・・・・んっ」

あのまま一晩眠れないかもしれないと思っていたが、どうやら眠ることができたらしい。舜はいつも通り荒々しく目覚ましを止める・・・・・・・・ふむ、バリケードに変化なし、衣服の乱れ無しと。何故かそのことをまず確認した。しかしあの親父のことだ、やりかねない。そして舜はもう一つ確認する。

「はぁ・・・・・・・・やっぱ現実かぁ」

部屋の姿見に映っていたのはやっぱり女の子だった。いつも見る姿が映っていないため、非常に違和感がある。

「・・・・・・・・！　　さて、女の子ってことは・・・・・・・・」

恐る恐る胸元を見る。・・・・・・・・やはりそれはあった。胸、小さい膨らみ。しかし大きさはそれほどなく目測ではあるが”A”程度だと思う。大きいのが好きなので、無駄に意識しなくていいようなのでほっとした反面、あまりの小ささに少し残念な気がする。

「って何考えてんだ俺、さっさと支度しないと」

パシパシと顔を叩き階段を降りる。が、

「つと、トイレトレイ」

トイレへ入りとりあえず仁王立ち、ズボンを下ろそうとするが生まれて初めて（記憶にある内では）トイレで詰んだ。

あれ、どうしたらいいんだろうか・・・・・・・・

思考停止。そこに丁度運良く母が通りかかったので、

「母上、トイレトレイニングをお願いできますか？」

「ブフッ」

母の熱心な指導もあり事なきを得た舜。今日は学校を風邪という

ことで休み、午後に仕事帰りの母と市内の総合病院へ行くことになった。何科にかかればよいのかわからなかったので、とりあえず幼い頃お世話になった小児科の堀先生を指名しておいてある。学校はいずれは行かなくてはならないが、そのことは考えないようにした。

午後、病院にて

「うーん、気がついたらこうなっていたと」

堀先生が唸る。やはり専門家でもわからないことなのだろうか。

「たしかに性別に変化があったりする病気はないこともないけど、これほど突発的なものは聞いたことがない。精密検査にも異常は見られないし……」

「な、治らないんですか？」

「なんとも言えんなあ。とりあえず定期的に検診して様子を見よう」
沈黙。

「しかし命に関わることでもないし、それよりはこれからの生活についてじっくり考えることを勧めるよ」

「そうですね、ありがとうございます」

一礼して部屋を出る。本当にどうしたものか……
とりあえずこれからは女性として生きていく他ない、そう思った。

「ふんふん、ふふーん」

帰宅すると限りなく不審者に近い身内がいた。無言でドアを閉める。

「おい舜、その態度はねえだろう」

「それはこっちのセリフや。どこの娘がカメラ構えてニヤついているオッサンと話がしたくなるんだよ」

「最愛の娘だからな、しっかりと（パシャ）記念に残しておかないと（パシャ）」

もはや不審者である、ていうかなんで某小学生親友のお父さんみたいになってんだよ。俺の認識もすっかり娘扱いか、残念だったな

昔の俺、お前の存在した証は消えつつある……
と、寂寥感がこみ上げる舜であった。

「大丈夫だ、いやしい気持などは一切ない！これだけは約束しよう」
某小学生親友の気持ちを痛感する舜。スルーして風呂に入ることにした。親父がついてきたが、ドアを堅く固く硬くロックしシャワーを浴びる。

「こうやって、まじまじと見るのは初めてだな……」

自分の身体を見て思う。なんとも言えないドキドキ感があるがどうやら男性だったころの意識のせいであって、本能的な興奮ではないようだ。いつそう性交換を認識する。そしてやはり薄っぺらい胸は見るたびに脱力する。

「明日は学校か……」

自分はどういう風に受け入れられるのか、悪くはされないだろうが不安だった。母が既にこの件については学校に連絡しており、朝のホームルームで話することになったと聞いた。担任の原田（先生）も驚いていたそうだ。

「まあ、なるようになるさ」

持ち前の前向きさを発揮する。今日は飯を食ったらさっさと寝ることにした。

俺はAだったようです。(後書き)

ドモドモ 作者の甘党です。

この物語を読んで下さったことにまず、感謝です。m(・|・)m
ちよっとスローペース？な出だしではありますが次回より学園生活
スタートでございます。パチパチ

一気にスピードアップす

今までの友人との関係はいかに？といった感じでしょうか

そういえば舜の一人称って「俺」ですよね、まだこれから変わっ
ていくのかもしれませんが 女の子らしくなるのか、ならないのか、
恋しちゃうのかしないのか、作者ですらわかりませんww

あと親父の変態振りにも注目でしょうかww

最後にちよっと言ってみたかったことで締めます

それではまた会う日まで、さよなら、さよなら

初登校！（前書き）

突如女の子になってしまった舜は事件後初の学校へ登校する。

今まで通り楽しく過ごしていけると思っていた彼女を待ち受けていたのは・・・

初登校！

「失礼します」

8時前、舜はいつもより早く登校し職員室へ入った。例の事件の後の初登校であるため、担任の原田（先生）と話をしに来たのだ。制服は近所の大学生が昔使っていたものを借りた。

「センス、あの……」

「おお、舜……でいいのか？」

「ええ、まあ」

「ふむ。あ、挨拶」

「おーっす」

「元気がないな、まあ無理もないか。今日の朝のことだが俺と一緒に教室へ行って皆の前で挨拶をしてもらう。転入生のようながな。詳しいことは俺が説明するからお前は立ってるだけでいい」

自分が全て話すことになるだろうと思っていたがそうではないようだ。やっぱり女子にはやさしいのか？と、少し得をしたように感じる舜。

「あと、これから喋り方には気をつけるんだぞ、女の子なんだからな」

「おいつす」

「いったそばから……」

「はいっ、センスっ」

自分でいったくせに吐き気を感じる喋り方だがこれでよいようだ。言われた原田（先生）も気分がよさそうだからまあよしとする。何かつつこまれるのも面倒なのでそそくさと職員室を出る。

その頃教室、あと少々でチャイムが鳴る時間

「舜のやつは今日も休みか」

「だな」

祐二と同じ陸上部の上原が言う。ちなみに上原は同陸上部にてだるい同盟を結んだことになっているらしい。

ガラッ

教室のドアが開く。入ってくるのは担任、そして一人の少女、それもなかなかの美形。教室がざわめく。

「先生！転入生ですか？」

「でも高校だろ？」

口々に何かいう生徒を担任の原田（先生）は咳払をし、

「では自己紹介をしてもらう。名前」

少女は言われた通り黒板に自らの名前を書く

高

峰

（おお？）

舜

「……」

一同沈黙。ほらね？こうなるでしょ？

「舜は原因は不明だが女性になってしまったらしい。医師の診断もしてもらったそうなので本当のことだそうです」

と、原田。

「舜？お前はニューハーフになりたかったのか？」

祐二の一言、クラスの空気が変わる。

「ええ！？マジ！？」

「祐二！ふざけるな。舜はほんとに悩んでいるんだからな」

「さーせん」

「まあ、特に注意することもないでしょう。舜には変わりないわけだからいつも通りやっていけばいいと思う。本人も急なことで苦労することもあるだろうから手助けしてあげるように」

「トイレとかな」

と祐二。鋭いが既に解決済みだ。

「じゃ、ホームルームに入ります」

こうして舜の新たな学校生活が始まったのであった。

「よお、上原」

「うわ、マジで声も女だよ……」

と驚く上原。それになんだかオドオドしている。やっぱり女子相手だからだろうか。

「まあ、いままで通りで頼むわ。関係が変わるのも面倒だから」

「面倒か。やっぱ舜だな」

理由はともかく納得したようだ。と、そこへ祐二が来る。

「よお、舜ちゃん。女の子になった気分は」

「まあ悪くはない」

「で、サイズ上から？」

「わからんがとりあえずAだと思う」

「ほう？」

祐二がジロジロみる。舜は言った後になってもものすごい恥ずかしさを覚えた。

えっ？なんだ、このなんとも言えない恥ずかしさは……顔がカッと熱くなる。

「ど、どこ見て言ってるんだよ！バカヤロ」

動揺しているのはバレバレである。顔も真っ赤だ。

ま、まさか祐二相手なんかにドキドキしてるのか俺……ま、まさかな。それだけはあってはならない。

祐二の方を見ると何やら女子に説教をくらっている。デリカシーの無い発言を指摘されているようだ。このとき舜はふとこれからの友人関係について考えた。このまま上原、祐二とつるむのか、新しく女子の友達を作るのか……考える。舜は前者を選んだ。

放課後になる。授業は舜の事とは特に関係なく進んでいった。大半の教師は変化に気づいたが、一部気付かないものもいた。舜はきめ細やかな授業を目指す校風に疑問をもった。そんなことはさておき、第二の関門部活動である。陸上部は男女混合で組織されているため、急に居場所がなくなったり、知らない部員の中に入り込むこともなかった。幸運でもあるが不運でもある。もちろん着替えは男女別、そして荷物はすべて男子部室にある。つまり男子部室に行かなければならない。

「ちわーす」

いつも通り部室に入る。いきなり女子部室へ行く勇気もないし第一信じてくれるかわからないので今日は男子部室で……………

「……………」

「ほんとに舜？」

まあ疑うよな。と思いいつもやっている高峰のポーズたるものをとってみる。

「本物だ」

「納得するんですか」

まあでも信じてくれたしいいかな、と思いう着替え始める。部活の開始時刻は近い。

ガサ……………」

あれ？　なんか変だな

と思いあたりを見回すと、

「おお……………」

皆見ている、自分を、勢いで脱いでしまい上半身は下着姿の自分を。

「んっ……………!？」

やばい！これはやばい！

すぐさまシャツをかぶるように着る。

「ああ……………」

先輩たちが溜息をつく。

舜はとても動揺していた。自分はもう男ではないということを実感したこともあるが、何より今までと同じように友と接することができないことが衝撃的だった。

初登校！（後書き）

ドモ 作者でございます

本日2回目の投稿でございます。 まだまだかけそうなので頑張つて書いてみました！

そのくせ中途半端なところで終わっているかもしれませんが（^ ^；）

さていよいよ学園生活スタートです！

舜ちゃんはさっそくバタバタ、ドキドキって感じですね

ちなみに舜ちゃんのイメージは

黒髪、セミロング、ストレート、釣り上った目だけど無気力っぽい
絶妙な感じ、小柄、ひんぬ・・・ゲフンゲフンです。

夢の中で（前書き）

男子部室でのちょっとしたアクシデントに戸惑う舜、彼女はやはり

「男の頃の自分」を捨てるしかないのだろうか。

さらに彼女の前に現れる新たな・・・

夢の中で

舜はストレッチをしている。今日の練習メニューをこなしダウンをしているところだ。そして、とても機嫌が悪かった。練習前に不本意ながら半裸を見せてしまった舜。その時は「もうこれまで通りではいけない」と、大げさにとらえてしまった自分に少し腹が立っているからだ。あ後は割と普段通りに会話もできてとりあえず安心した。余計なことを考えてしまったものだ（もしかすると身の危険を感じたのかもしれないが）。だがそれよりも腹立たしいのが、部室に戻った舜に何かやらせようとしていることだ。同級生の中で女体化したをよいことにコスプレをやらせようとしている輩がいるらしい。

やっぱりあの衝撃は身の危険を感じたんだな。

と、合点する。ちなみに女子の先輩でもリーダー格の先輩に今日の帰りから女子部室を利用することを許可された。噂の広がりが速いのと、元男の俺をわりとあっさり受け入れたことに驚いた。集合、挨拶終了後部室へ向かう。男子は俺を奪還しようとしたが例のリーダー先輩に堅く守ってもらった。

「ようこそ。ゆっくりしてってね」

と先輩、ノックをして扉を開ける。そこにあったのはかつての楽園だった。うちの野郎共に語ってやりたいものだ

「ど、どうもです・・・」

えらい緊張している。どうやら一番奥の席が空いているようだ。そこが新しい席らしい。

「にしても、きれいな部屋ですね」

率直な感想。まあ男子部室がひどいだけなのだが。我が男子部室はそれはもう汚いのなんのって、いつゴキが出るかもわからないし、カーペットには何故かカビが生えているし、部屋の真ん中にはエロ本が平積みになっているしでいろいろな意味で人を入れたくない部

屋だ。それに比べここは……新築並みの美しさに感じる。

「そうでもないよー あ、それより……」

先輩がズカズカやってくる。そして肩を掴まれ、

「ここの大きさって……どれくらい……?」

「……んっ!？」

誤解されるような言い方だが、女の子同士の会話なのでいたって健全? はず。

つか、先輩! そんなキャラなんすか?

「あら残念、この中では最小ね……」

余計なお世話……って、部員全員のサイズ把握してるんすか? 先輩。

「ほっ」

安心する先輩もいたりする。やっぱ負けるのは嫌なんだなと思う。

「じゃあ、今度サイズアップの秘訣を教えたいよ♪」

※女子の会話です。決しておも……

「は……はあ」

その後、ざっと1時間、男子部員の悪口など今まで見えなかった世界のお話を聞かせてもらった。

「お、おつかれさまでした……」

「はい」

や、やっと帰れた。噂に聞いてはいたがやっぱり女子の話は長い。さっさとオチを出す男子部員の中で生きていたので余計長かった。

「あーしんど」

帰宅、さっさと風呂に入り飯を食って宿題はやらずに寝る。この時期はいわゆる冬季練習といって練習がキツく長い、今日のように長々話をする家が遠いこともあり帰りは9時近くなる。これからは痴漢とかに気をつけなくてはと思った。パソコンをつけて一通りサイトを巡回したら眠くなったので寝る。舜の1日は大体こうして

終わる。

・・・・・・・・・・

「どお？女の子になった感想は？ うふん」

セリフは何とも女性的だが、正体は脳天ハゲ、そのくせサイドは昔の作曲家みたいにもっさりとした白髪のロン毛、オネエ感ギンギンのツラ・・・・・・・・のジジイだ。

「ずいぶんとヒドい紹介ねえ」

「いえ、ありのままを言っただけですよ」

「あなたをその姿にしたのはこのア・タ・シよお？ 感謝しなさい
ってば」

「！？ どういうことだ！」

「教えてほしいいいん？」

き、キメエ

「お、教えてください」

「そんなに？」

「はい」

「どおしようかなん？」

く、そ・・・・・・・・ガマンだ、俺。

「お願いしますっ」

最近覚えた茶目っ気？を使う。

「おほっ♪じゃ、教えちゃう♪」

理由は・・・・・・・・ 軽く身構えてしまう舜

「萌えるからよっ」

頬を赤らめて言うジジイ

「・・・・・・・・・・」

夢の中で（後書き）

どうも、作者甘党でございます。

編集画面を見ているとぼちぼち評価のポイントとか、コメントとか入っていました。 ああ、ありがたやありがたや
こっこれは！

ということで甘党の創作意欲が上昇しました パチパチ
面白い作品をかけるよう頑張ります！

天罰！（前書き）

異様な雰囲気の人に出会った。この人物が舜を女の子に変えた
というのだが・・・

そして、この老人を怒らせた舜は天罰？を受け・・・

天罰！

「萌えるからよっ」

俺、つまり舜を女にしたと言うジジイはこういった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「無気力、おおざっぱ、めんどくさがり屋な性格、でもやる時はやれるっていう本番の強さ、そしてなによりこの世に二つとない天性のツンデレ・・・・・・・・これで女の子だったらッ　ワタシのストライクゾーンど真ん中ッ！」

へなへなと倒れこんで語るジジイ。

「あの・・・・・・・・あなた誰ですか？」

とりあえず丁寧聞いてみる。

「おっと失礼、ワタシはそうねえ・・・・・・・・萌えの神様、といったところかしら」

「聞いたことないんですけど」

「無理もないわ、何せ正式なものではないのよ。話せば長くなるけど・・・・・・・・」

長々と話をするジジイ。要約すると、最近巷で『萌え』が流行っていて、後に神様となる予定だったこのジジイは「萌えにも神様が必要だ」と半ば自分の都合で萌えの神を名乗っている、ということだ。今申請をしていて、承認待ちだそうだ。

「つか、あんたの都合じゃなすか！」

「そうよ、文句ある？」

「あんた男だろ！」

「そうくるなら」萌えに国境も性別も分類群も関係ない」と答えるわ

だんだん頭にきた舜。

「何が萌えの神様だただの自称じゃねーか」

「うるさいわねえ。承認待ちなのよッ！そろそろキレるわよ！」

「うっせー、このモーロク爺ィ！」

「暴言を吐く性格はいただけないわねエエエエエツ！もう怒ったわ！お仕置きよ！」

と言うと萌えの神様はそれらしく杖（幼児向けアニメに出てきそうな）を取り出し上げられた杖から星型の何かが飛んできて・・・

「うわーっ」

「ひいっ」

舜は飛び起きた。朝の7時近くだった。

「なんだ、夢か」

よくある夢オチっていうやつだ。

「起きるか・・・」

階段を降りる。リビングに入ろうとすると隣の部屋で親父が寝込んでいるのが見えた。

「どうしたんだ親父」

「し、舜・・・ううう、ううううう」

なぜか親父が急に泣き始めた。

「もしかしてクビになった!？」

「違うよ。インフルエンザよ」

と母さん。

「泣くなよ、クビにはならないと思うからさ」

「くっ・・・ズビッ」

「あんたが数か月振りに話しかけたりするからお父さん泣いてよろこんでんのよ」

「ああ、昔はお風呂も一緒に入ってくれたし、パパと結婚するとか言ってたし」

うーん、何かがおかしいな。

にしても早く学校へ行かなければならないので、さっさと食事を済ませ家を出る。

「うーす」

「おーっす」

いつも通り祐二との朝の挨拶、そして今週末は休みなので

「日曜日さあ、カラオケとゲーセンいこうよ」

「おう、いいぜ」

難なく交渉成立、とそこに

「へいへーい、お熱いねえお二人さん！」

「その次は休憩だろ？」

聞いたことのない冷やかし、まあ俺は女の子だからなあ

「うるせーわ、そんなんじゃないから」

と祐二がやや焦りながら言う。珍しい。

「どうしたんだよ、なんたってことないでしょうが」

「いやいや、これからは人前では約束しないようにって話じゃなかったのか？上原にも」

「気にすんなって」

「おい、お前は一応女の子なんだぜ？」

「そうだけど元は男やでー」

とサイドチェストをやってみせる。

「おい、熱でもあんのか？お前は最初っから女子だよ」

「おい、数日前のことをもう忘れたのか、俺はなあ女の子になったんだよ」

「大丈夫か？確かに男っぽい性格ではあるが・・・」

話がかみ合っていない、そこに祐二が携帯で撮った写真を出し、

「ほら、5月の文化祭の写真、数日前どこじゃねーよ」

確かに女子の姿の舜がいた。5月はまだ男だったはずなのに・・・

「え、まで　こんなはずはない」

チャイムが鳴り席に着く。何かがおかしい

朝からおかしいと思っていたが、これはもしかして・・・

そんなことを考えながら1日を過ごした。勘が正しければあのジジイの仕業に違いなかった。夢の中で会えると思ったので、授業中に居眠りしたが、怒られただけだった。

帰宅後、

食事、風呂等足早に済ませ寝ることにした。

「くっそーあのジジイめ、何しやがったんだ」

先ほどアルバムなどを確認してみると、自分のところはすべて女の子に変わっていた。生まれた時から女だった、とすれば今日の奇妙な出来事をつじつまはすべて合うことになる。しかし、名前や友人関係などかなり矛盾してしまうところもあるが。

・・・・・・・・・・

「あらまあ、何のようかしら」
ジジイだ。

「おいジジイ、何したんだよ」

「何って、あなたを完全な女の子にしてあげただけよ？」

あたりまえの事のようにいうジジイ。

「ほんとは徐々にと思っていたけど、頭に來たからやっちゃったのよ」

ったく、このジジイってやつは。

「諦めなさい、どうにもならないんだから。はい、ばいばい」

「んはっ」

夢が覚めた、朝になっていた。

「やれやれ、とりあえず現状を把握しなきゃ・・・・・・・・めんどくせー・・・・・・・・」

舜は重いため息をついてベッドから降りた。

天罰！（後書き）

どうも作者こと甘党です。

まずは・・・・・・・・

地震の被災者の皆様には心からお見舞い申し上げます。

私も何か協力できることを、ということで明日にも募金をする予定です。

一日でも早く復興することを祈っております。

さて、私は大地震が心配される地域に住んでいることもあってか、とても他人事ではありません・・・・・・・・明日は我が身のとおり明日自分が何事もなく暮らせるわけではないんですね・・・・・・・・

- ・

と、荷物をまとめ始めた作者であります。

で、物語のこと。

なんかインフラの整備に手こずっているようです。

デート！？（前書き）

例のジジイのせい？で本格的に女の子になった舜。

その影響か、高校入学当時から親友である祐二の心にも変化が・
・・・？

デート!?

何人もの人が一つのゲーム台の周りに集まっていた。彼らの視線の先には上位ランクの強敵を流れ作業のようにテキパキ倒し続ける少女がいた。何度の高い技を難なく使い、まるで一つの演技であるかのように敵を倒すという常人離れたパフォーマンスも注目されるものではあるが、何より背格好16・7才の小柄で美形の少女が制服姿でしかもガニ股で座ってプレーをする姿は圧巻であった。

「あれでもう3週目だぜ・・・・・・・・」

「かわいいカッコしてるんだけどな・・・・・・・・」

もちろん店内対戦を吹っ掛ける者などいるはずもなく、彼女の向かい側の席は敬遠され隣の台には行列ができていた。が、たった今挑戦者が現れる。

「す・・・・・・・・すげえ」

その挑戦者は少女と同等、むしろそれ以上のプレーを見せる屈指の強者であった。さらにギャラリーが増える。そしてフルラウンドを戦い抜いた末・・・・・・・・

「つべ、負けちゃった・・・・・・・・」

「おお」

「ついに倒した!」

挑戦者にも少女にも大きな拍手が送られる。そして二人は健闘を讃えあうように近づき、

「やっぱり祐二か、かなわねーな」

「後ろがつかえてたからな、ちゃんと譲ってやんなきゃダメだぞ?」
どっからどう見ても仲良しの会話であり、

「こいつらカップルかよ!」

「とんでもねえ!」

カップルの仲である。まあ不思議と後者のような関係ではないのだが。

例のジジイに会ってから数日、舜はいろいろと調査をした結果、
どうやら最初から女として生まれていた、ということに過去から何
からジジイに改変されてしまっていることを知った。祐二の下ネタ
の頻度もかなり減ったし、女子が苦手な上原は挙動不審気味に話す
ようになったり、「優しくなった」と親父は泣くし。しかしかなり
の矛盾点があり名前を始め、男子は「昔から仲良くしてるはずなん
だが、何故いつから仲良くしているのかよくわからない」といった
違和感を感じているし。関わりの薄かった女子に至っては「いつか
らいるんだっけ？最初からいなかったような、でもいたような」と
言われる始末である。つまり……

あのジジイのミスがかなり多くある

ということだ。平常心を失った状態でのジジイの天罰だったような
ので、正確な変更が行われなかったようだ。本当に厄介なジジイだ。
そして今日はそんな中でのデート……ではなくていつも
の仲良しメンバーで遊びに来ているのである。

「そろそろ帰るか、上原呼びに行こうぜ」

と祐二が言う。上原はかなりのパチンコ、パチスロ好きで、「ゲー
ムは金の無駄、パチ打った方が金も入るしいい」と言っ、普通の
ゲーセンでもパチを打っている（金にはならないのだが）。

「当たった？」

舜が聞く、

「さっぱりだ、そろそろ行くか？」

どうやらこっちも潮時のようだ。ということで外へ出る。もうあ
たりは真っ暗になっていた。

「じゃあ俺はここで」

と言っ上原はさっさと帰ってしまった。彼だけは家の方向が違
うので別れるのが早い。それに迅速帰宅主義者でもあるため帰宅は
早い。そのため祐二と二人で帰る舜。

「じゃ、うちらもここで」

駅の駐輪場近くになったのでそろそろ別れねばならない。が、祐

二が

「送ってってやるよ」

意外な一言を言ってきた。同じくめんどくさがりのはずなのだが。

「いいよ、1人でも大丈夫」

と、舜が言うが、

「なんかよくわからんが、お前も女だろ？ その・・・危険だからさ」

舜はドキッ、つとした。不意に祐二の優しさを感じ戸惑ったが、心配されていると感じてとても嬉しかった。と、同時にとても恥ずかしいというか何とも言えない気持ちになったが、

「わかった、じゃあお願い」

二人は改札を通り、電車に乗った。

カタン・・・カタン

夜の街を走る電車。祐二と舜は隣り合わせで座っている。

「・・・・・・・・（ゴクリ）」

祐二の顔はとてもこわばっていた。なぜかと言うと・・・・・・・・

その原因はやはり隣にある。

「す・・・・・・・・」

疲れているのだろう。今日はよくわからないがカラオケでヤケになって歌っていたし、格ゲーは何戦やってたかわからないし・・・・かなり体力を使ったはずだ、で寝てしまったわけであるが。

「こんなに可愛かったんだな・・・・・・・・」

今まで気付かなかったこと、意外な事実。記憶では入学当初から付き合いがあって、気が合って一緒にると楽しくて、なぜまだ、ただの友達の関係なのか、そもそもなぜここまで仲良くなったのか思い出せない。記憶が飛んでしまっているようだった。クラスの野郎どもに野次られるのも最近からだったはずなのだが・・・・もう一度舜に目をやる。よく考えればなかなか好みの顔立ちの少女が無防備に自分の肩によりかかっている。いつの間にか手を握られ

ている。胸こそないが、体系はかなりエ〇いよく俺は手を出さなかったものだ、と祐二は思う。

「や、やべえ・・・・・・・・・・」

心臓の音がバクバク聞こえる。数日前までは何ともなかった（はず）なんだが・・・・・・・・・・

「この・・・・・・・・・・じじー・・・・・・・・・・」

「どんな夢見てんだよ・・・・・・・・・・」

と思いつつも頬が緩む。そしてこのまま・・・・・・・・・・と思ってしまふ。ただの友達のはずなのだが。

「次は、波川、波川」

舜が降りる駅だ、起こさなくてはいけない。

「おい、起きろ。着いたぞ」

「・・・・・・・・・・んっ・・・・・・・・・・」

体を起こしてやる。そして舜は気づいたのか、

「ちよっ！？なんで手握ってんの？」

「さあな、お前が握ってきたからなんだが」

答える祐二、凶星を食らったのだろうか彼女は慌てて、

「誰がおまえなんか・・・・・・・・・・むう」

ふくれている。

や、やばいって

なんとか抑え込む祐二。そうこうしてる間に電車が止まる。電車を降りて、

「あ、じゃあ祐二、また明日」

「おう、またなお疲れさん」

いつも通りの別れの挨拶だった。祐二は再び切符を買い、上り線のホームへ降りる。

「なんなんだかな」

もの寂しさを感じながら祐二は帰ったのであった。

デート！？（後書き）

どうも、作者こと甘党です。毎度ありがとうございます。
さて・・・・・・・・

ついに我が静岡県でも強い地震が・・・・・・・・
ど、どうしたものか・・・・・・・・ガクブルガクブル

毎晩緊急地震速報のブザーに怯えながら寝ております。あれはほんと
とびじるんだよ。うん。一人の部屋でとか特に・・・・・・・・
で、物語のことについてですが、

もう少し舜とほかのキャラのセリフの区別をしたいかなと
そんなところであります。あと、

方言とか入ってませんか？ w w w w

意味等質問あったらお答えしますよー

ではまたノシ

敵（前書き）

性別は変わっても何ら変わらない日々を過ごしている舜。
マラソンなどかつたるいことがあるものの平和であった。が、そ
れをそれを乱す”女”が現れ・・・

敵

「あゝだりいなあゝ」

舜は大きな伸びをして言う。

「クッソゝ次はマラソンか」

と、祐二。

「お前らすげーオーラ出てるぞ」

上原はトイレ帰りに言う。

今日も3人で昼食をとり、昼休みを過ごしている。この1年間ずっとこうだ。最近になってこの中でどの2人が”できている”のか話題になっているようだが特に気にしてはいない。まあ確かに上原も含め、美男女の集まりではあるのだが（当の本人たちはそのようなことは思ってもいない）。そして今日の午後一発目の授業は体育、オマケに近く開催されるマラソン大会に向けた走り込みである。よってこの3人、他人を寄せ付けない”負のオーラ”をまき散らしている。

「つたく、俺らがハーハーしてるの見て喜ぶのかよ体育教師さまはよお」

と、祐二。

「まあねえゝ、女子ならともかく男子とかだったらちよっとアブナイし、つか女子もお断り」

と、舜。

「男子短パン、女子ハーフパンツ。普通逆だろ、女子の足が見えないやんかい。やっぱアレなんじゃね？」

上原も乗る。3人の会話はいつもこんな感じである。上原を除き、趣味は主にパソコン特に動画サイト、掲示板巡りなのでこの手のネタばかりが話題になる。しかしこれが彼らの日常であり、平和を意味するのだ。

「ユージーン！」

しかし、最近それも乱れ始めていた。祐二を呼んだのはこのクラスかは知らないがこの頃祐二に付きまといっている”リコ”とかいう女子だ。禁止のはずだが茶髪、髪は長くてギャルっぽさ満載、綺麗かはわからない。マラソン練習で他クラスとの接点が増えたため割とイケメンな祐二は目につくようだ。数日前（舜がまだ男だった頃）はつかの間の団欒タイムに割り込んでこられたのが気に食わなくて、上原と邪魔だなんだと言っていたが、

「……………（ムスツ）」

舜は少し違った。今までとは違う理由で頭にきているような気がするのだ。

「なんだよ、ムスツとしてさ」

上原が言う。

「んは！？　ち、違うし。つかベランダ行こう」

（凶星？　まさかね……………なんで祐二のことで……………）

こういうときの避難場所はベランダになっている。あの女の声は甲高くて耳障り、と上原は言っている。同じく他の男子もベランダへ避難している。

「キャツキャ」

本人は気付いているはずもなく。

結局チャイムギリギリまで話し込んでいたようだ。急いで着替えて外へ出る。

「くっそー、ついに来たか！」

上原が頭を抱える。

「俺らは35分、舜チャンは25分だな」

男子は本番15キロ、女子は8キロというなんとも不公平（と男子は言う）距離設定。舜は少し得をした感じがして、モチベーションが上がるかと思いきやそれなりの辛さがあったので結局、

「ウチらもそれなりにダル距離設定になってんの」
頭を抱えるのであった。

アップが終わりピーという笛の合図で走り込みが始まった。重い足取りでそれぞれ走り出す。男女別メニューなので一緒には走らないが、お互いすれ違う度顔をしかめ合った。そして、そんな時間も終わり、

「や、やったぞ」

達成感を感じながら教室へ戻る、途中に、

「ゆーじん♪」

ヤツが来た。

「今日は一番だったよー」

「御苦労さんだな」

あまり人と話すときはめんどくささがあっても表情に出さない祐二、だからこそ気になることがある。

「氣にくわねーのか」

上原が察することができると態度に出てしまったようだ。

「うるさい!」

舜は、祐二に駆け寄り、

「さっさといこ!」

「お、おう　じゃ、そゆことで」

奪還する。自分の方を優先した、という事実が嬉しかった。ということに気づき

(やだやだ)

と首を振る。そして後ろの方で

「何様?」

とヤツを中心にしたグループに睨みつけられていたような気がした。

敵（後書き）

どうも作者こと甘党でございます。

今までのペースからして少し間が空いてしまったようなような。べ、別にネタ切れとかじゃないんだからね！

とか言ってみたり。

設定上では現在2月のはずなのでイベントってのが少ないんですよ。早く春が来ないかなあ……

twitter始めました。更新の連絡はそこでやります。いち早く！って人がいたら！ 見てみてください。

http://twitter.com/#!/amato|sana

攻撃（前書き）

ライバル出現！？

舜とリコの壮絶な奪い合い勃発！

攻撃

ヤツが動くまでそう長く時間はかからなかった。

「昨日は一緒に帰ったんだよねー」

と、リコはわざとでかい声で言う。明らかに舜を意識したものだ。あの体育の授業後すっかり向こう側はその気になってしまって、舜をライバル視している。教室にくる頻度も増え、朝黒板にどでかくアイアイ傘を描く始末だ。スルースキルの高い舜はいつもスルーの方向なのだが、

「……………ムスッ」

今回はそうはいかない。舜自身、驚いていることだ。逃げまいということで、教室に残っている。不自然なので嫌がる上原を力でねじふせ、隣に配置する。甲高い声を聞くのが苦痛な上原は耳腺代りに音楽を聴いて寝ている。

（ウチが電車通いだからって……………）

とことん頭に来る女だった、仕掛けてくるくせ、告白できないくせに。いや、してるようなもん？

ボディータッチが激しく抱きついたりしているので本当に頭に来る。

「好きなんじゃないの？お前も」

と、ツツコミが入りそうだが、

（そんなんじゃないくて、話相手が減ってつまらないし、あの女自体が嫌いなだけ）

と言いつけている。その割、思い切った行動ができていない。

「高峰さんってさー、友達？」

最近そればかり聞く

「や、友達だな、たぶん」

それしか祐二が言わないことを知って聞いているから本当に頭にくる。精神攻撃でもしているつもりだろうか。

「いててて！」

気づいたら上原の足をグリグリと踏みつけていた。

放課後、部活がないのでいつも通り祐二と帰ろうとするが、先客がいる。

「おう、舜ちゃん」

「あれー、高峰さんってそういう仲じゃないでしょ？一緒に帰るのはあたし」

抱きついてみせる。

「別にそういうわけじゃ。今日は寄るところあるんで
でまかせだが、今はそれしか言えなかった。」

「そうですかぁー、ではごきげんよー」

祐二を引きずるようにして去る。あの女にも、対抗できなかった自分にも腹が立った。目に入った上原の自転車を蹴とばして全速で帰った。

「なんなんだよ！別に関係ないじゃん！」

戸惑っていた。自分が女でもまず好きになることはないだろうと思っていた男に、今恋しているかもしれないことに。

（でも、大事な友達だもん。上原だって同じはず）

そう考えて気を落ち着かせるしかなかった。言い訳なのかもわからない。

相談、しなきゃ。

母さん、親父、上原。真面目に聞いてくれそうなやつはいない。そこにふと、浮かんできたのが、

「変態ジジイ………？」

就寝後、しばらくすると

「呼んだかしらん」

ジジイが現れる。

「お悩みのようねえ。どうせ祐二クンのことでしょお？」

「ん………まあ」

「たしかにワタシもかなりタイプの子よん。気が合いそうだし」
「萌え方面でな」

「どうやらアタリだったようだ。割と真剣に聞いてくれる。」萌える”と絶叫しているが。

「そおねえ、やれることって言ったら．．．．．やっぱりもつと触れてあげることじゃない？男の子ってそういうのには弱いよん」
「え．．．．．無理、絶対無理！」

「無理って、もう。まあ恥ずかしいものよねん」

「ふん」

「まあ好きな子についていわれても．．．．．」

「違うから！べ、別に」

舜は叫ぶ。しかしジジイは

「あなたは恋してるのよ。認めなさい」

いつになく真剣な声で言った。

「とにかく、それを前提にできることをするだけよ、自分に嘘はつかないこと」

それだけ言って、舜を夢から覚ました。

気づくと朝だった

（やっぱり．．．．．好きなのかな．．．．．？）

攻撃（後書き）

どうも作者こと甘党でございます。

長いので2部に分けてみました。まとめちゃうのもありますが切りのいいところで読み終われそうにないので、というのが理由です。

さて、いよいよ戦いの幕が切って落とされました！

なんかこういう戦いの場面って書いてて楽しい！妄想爆発させて書いていきたいと思えますww

今後ともよろしくです

ついったです<http://twitter.com/#!/atomisan>

そのころの祐二（前書き）

リコの登場によりギクシャクし始めた祐二と舜の関係。リコの徹底的な煽り攻撃を目の前にした祐二は・・・

そのころの祐二

（前話から1週間後の話）

今日もとても面倒な日だった。

マラソン終了後、リコはすぐにやってきた。好かれようとは思っていないのだが、どうやら気に入られたらしい。まあ女の子に気に入られるというのはまんざらでもないのだが。

（すつきりしねえな）

前から彼女が欲しいと上原をはじめ、舜（言うべきことではないのだが、なぜだろう）にもよく言っていたことだった。そしてついに、

「ねえウチと付き合わない？」

帰り際、とうとう言われた。自分でも結構肉食系だと思うのだが、

「ちっと……待ってくれないか」

と言って逃げてきたのだ。帰り道、いろいろ考えてみようと思ったのだが面倒になってやめた。

「かーっ」

クシャクシャと頭を掻く。頭の中に浮かんでいたのは、この先あるであろうリコと過ごす日々ではなく、電車の中で自分を枕にして寝る舜の姿だった。

（好きとかじゃなくて、残されたあいつがどうなるか気になるんだよな）

いろいろなことが噂されてきた2人の仲、（女子に聞いたら上原はないということだそうだ）知らないうちに、彼女を期待させたり、傷つけていたかもしれない。そして、今回のことをどう伝えたらよいのだろうか。勝手ながらこの関係は崩したくないのであった。

翌日、

「よお、舜ちゃん」

いつも通り挨拶を交わす。が、

「・・・・・・・・ん」

と言っただけでどこかへ行ってしまった。やはりここ1週間ろくに話せていないし、機嫌を悪くしてしまっているようだ。

「ま、そういうこともあるさ」

察したような口調で言う上原。

「お前に言われるようじゃ、おしまいだな」

（今日もだりーな）

席に着く。担任の原田が入ってきてホームルームを始める。

「祐二、昼休み。職員室な」

またお呼ばれされたようだ。まあもはや日課なのだが。

「木本君、起きていますか？」

「木本君、起きなさい」

「祐二、起きろ。顔洗ってこい」

「お昼前で大変でしょうけど寝ないようにしましょうね。木本くん」

午前のすべての教科で教師に起こされた。何もする気になれなかった。

（そういえば、リコが絡んできてからか・・・・・・・・）

いつものメンバーとうまういなくなっているのはわかっていた。

リコと仲良くしていく上では仕方のないことなのだが。そして・・・・・・・・

カタカタカタ・・・・・・・・

今日の昼食は無言だった。祐二は職員室行きを理由に抜け出すことができ、ほっとした。あとは頼んだ、上原。祐二は職員室へ向かった。

教室に入ろうとすると、教室は異様な雰囲気で満ちていた。窓から恐る恐る見てみると、

リコと舜が何やら口論をしている！？

「おい、何があった」

ベランダに避難中の上原に尋ねる。

「ヤツが来たんだが、やっぱり舜のやつ機嫌悪くしてな。やらしく尋ねられて舌打ちしたらムツときちゃったらしくて。このサマだ」

「何やってんだよ」

責任を感じ、祐二は止めに入ることにした。

「落ち着けてお前ら」

とりあえず2人の間に入る。

「祐二」

舜は一步下がる。しかし血の気の多いリコはというと

「高峰さんはただの友達でしょ？　なんでウチらの関係に入り込んでくるのよ！」

「落ち着けて」

しかし聞く耳をもたない。そして舜は黙り込んでしまっている。

「ほら、この子ったら何も言えないじゃない。やっぱりダメな子ね。ほんとに祐二くんが好きなんじゃないの」

「ち、ちが！」

「言いすぎだリコ！」

本当によく煽るやつだ。

「高峰さん、ウチたちが付き合っていてこといったら、ものすごく怒っちゃうんだもの」

「おい、それはまだ・・・」

なんなんだコイツ、腹たって来たな・・・

「だって認めないんだもん。自分が祐二くんに何とも思われてないことがさあ」

(・・・)

今にも泣き出しそうな顔の舜　こっちを見ている。

「高峰さん、あなたはねえ？」

お人好しのユージンに適当に相手に

されてるだけなのよ？　ね？」

ツッ

何かが切れるような音がした。

「リコ！いいか！・・・」

祐二は気付かされた真実を胸に、大声を張り上げて言う。

そのころの祐二（後書き）

どうも、作者こと甘党でございます。

今回は祐二回といったところですが、視点を変えて、人物の状況がより詳しく書けたらと思ひまして。

これから少し時系列が前後します。少し読みにくかもしれませんが、

2つのルートが、つながった！という場面がありますのでその時をお楽しみに！

なにかありましたら `twitter` のほうまで！ `@amato`
`san`

お色気作戦計画（仮）（前書き）

打倒恋敵リコに燃える？舜に心強い味方、ミキが登場。彼女も何か事情があるようだが、舜をプロデュースするべく街へと赴く。彼女が提案したのは「誘うような服」という何ともけしからんものだった

さらにとある日の昼休み、ついに彼女らの直接対決が始まる……！

お色気作戦計画（仮）

（9話から6日後くらいの話）

「これなんか似合うと思うよ」

舜は今、街の服屋に来ている。そして今服を一着勧められている。

「なんか派手。ウチには似合わないかな・・・」

鮮やかな赤が基調のパーカー、ルーズな性格にはルーズな服を、
というのが理由だそうだ。

「じゃあ、何色がいいの？」

「白・・・かな」

「清楚な感じが好きなのかな？　じゃあ・・・」

と、馴れ馴れしく買い物をするこの女子。昔からの友達ではなく、
つい最近関わりを持ち始めたばかりなのだが、すっかり親しい仲になっている。

「木本君って割と派手な方が好みらしいけどねえ」

「なんで知ってんのさ」

「噂だよ」

名前はミキといった。ウェーブのかかったロングヘアと優しい感じのたれ目が印象的だ。それにしても何故かミキはいつも祐二のこ
とばかり取り上げる。2人をくっつけようとでもしているのだろうか。最近
はミキと過ごすことが増え、祐二とカラオケにも行けなくなり本末転倒な
気もするが。

「まずは身だしなみから。肉食系男子の心をくすぐるエロコーデが
いいわ」

と言って、胸元の大きく開いたワンピース（袖もあるタイプ）を
購入。その後も明らかに誘っているような服を次々提示してくる。冬
にミニスカはやっぱりよくわからない。服などは毎日行くようなこ
とはなく、月3回がいいところだったが。ここ最近ほとんど服屋
に通っている。

「じゃあこっちの白ベースにピンクのパーカーがいいかな？」

「うん。こっちならいかな」

ということでお買い上げ。ポイントカードのポイントが貯まっていたので、いくらか安くなった。

「疲れた」

ミキは伸びをする。確かに今日はよく歩いた。

「これでは祐二クンを誘うだけだね！」

「あ、うん」

「ま、あとはいつものことだから大丈夫かな？」

ここまでお膳立てしてくれたんだ。頑張らなくてはいけない。

(このエロさで、あいつを落としてやる)

「てかさ、なんでここまでしてくれるの？」

気になっていたことを舜が尋ねる。

「え？、あ、なんか応援したくなっちゃってさあ。あんなに仲がいいのにそれだけで済ませちゃうのはよくないじゃん？」

と、ミキは答えた。

(もしかして……ミキも祐二のことを)

そんなことが頭をよぎる。同じ境遇にあるかもしれない舜に同じ思いをさせないためなのか。

「じゃあ今日はここで。バイバイ」

「うん」

彼女は振り返って走り出す。一瞬複雑な表情が見えた気がした。

翌朝、舜は早めに目を覚ました。なぜなら早く学校に行き、リコに祐二を独占される前に遊びに行く

約束をするためだからだ。最近リコは祐二とよく出かけていると教室で自慢げに話していた。本当に頭に来るやつだ。だからそんなヤツが来る前に蹴りをつけておきたいのだ。

「おお、舜チャン。今日は早いな。宿題やってないのか？」

「いや、何となくかな。それよりさ、今度の日曜の午後、部活終わったらカラオケ行かない？」

「いつもと同じ用に誘う。」

「おう、いいぜ。なんなら2人でも」

全く普通にいえばよいものを、と思いながらもとりあえず目標は達成だ。

「俺は？」

上原も来たがているので呼ぶことにした。

昼休み、昼食を食べ終わり3人はというと何をするわけでもなくぼーっとしている。次の教科は3人が最も愛する教科、社会科である。昼寝し放題に加え、教師の安眠ボイスのおかげで他教科より他の生徒にも圧倒的な支持を受けている。寝るもよし、授業を受けるもよし、ゲームをするもよし、内職をするもよしだ。そのため、余計な心配ごとをせず、安心して昼休みを過ごせる。と、そこにミキがやってきた。

「舜ちゃんいる？」

「どうやら用があるようだ。」

「何？ミキ」

「今度の日曜の午後空いてるかなあ」

遊びの約束のようだが、あいにく予定がある。

「ごめん、祐二と遊びに行くんだ」

「えっ」

ミキが急にオドオドし始める。

「どうしたの？」

聞いてみると、はっ我に帰って、

「ううん、なんでもない。頑張っただけ」

とだけ言って言ってしまった。どうしたんだろう。

（悪いことしちゃったのかな）

よくわからない。そして眠い。

「ふぁ……」

5時間目開始のチャイムが鳴る。無論舜ら3人はフルタイムで寝た。

放課後、部室へ向かおうとすると、リコとミキが何か話をしてい

る。
(ヤツに絡まれてるのかな……・……・祐二が気になってることが
バレないといいけど)

そう思ったが、どうやらその心配もなさそうだ。何事もなく別れる
二人。

「さ、部活、部活」

今日の練習は、すこぶるキツかった。

「あら、カワイイ服♪」

就寝して間もなく、例のジジイが現れた。

「萌えるわっ。チラリとのぞくあるようで無い谷間ッ！」

なぜか買ってきた服を着ている。これも神様(自称)の力なのだ
ろうか。例のワンピースを着せられている、かなりダボついていて
すぐに脱げそうだ。ニーハイソックスも着用してる。

(って、これは明らかにジジイの趣味構成？ かなり好きな物の寄
せ集めな気が……・……・)

「あなた何フェチですか？」

「つるぺた属性もあるわよっ」

ウインクするジジイ。気色悪い。そういえば、これを家で着て見
たとき、親父も似たようなこと言っていた気がする。ますます寒気
がした。

「しかしあのミキって子、どうも気になるわね」
ジジイが言う。

「やっぱりですか？ ウチもです。祐二のことが好きっぽくて」

「そおなの？ それならいいんだけど」

「どうやらそのことではないらしい。」

「フラグは立てないでくださいね」

とだけ言ってジジイのもとを去る。

翌日、今日はいつも通りギリギリの時間で起きる舜。だるくてしようがない。なぜなら今日は1時間目から体育というなんとも酷な日程だからだ。社会科もない。

「あああああ」

頭を抱えて唸る。ここまでくると、もはや悔しい（何かが）。しかし、学校に行かないわけにもいかなないので仕方なく支度をして家を出る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

学校に着いた後もずっとこのテンションだ。そこに祐二が登校してきたらしく。

「よお、舜ちゃん」

いつも通り挨拶をしてくるが、

「・・・・・・・・ん」

とだけ言う。とにかくだるかった。もはやこれは体育だけが原因ではないような気がするが・・・・・・・・

その日の午前の授業が終わった。今日はやたらと祐二が怒られていた。なぜかはわからないが、まあいつものことなので気にしなかった。

（で、今日もお呼ばれか）

無言の昼食の中、「ちよっと行ってくる」とだけ言い残し職員室へ祐二は向かった。そこへ・・・・・・・・

・

「ゆーじー」

甲高い声が響く。一番聞きたくない声。男子総員、自主避難を始

める。上原も無言で去ってゆく。

「あれー、ゆーじー？ゆーじー？」

祐二を探しているようだ。いないことに気づいたのか、ガニ股で構える舜に向かってくる。

「高峰さん、ゆーじどこお？」

「っつ……知らない」

舌打ち交じりで言う。こういう絡みは大嫌いだった。わざとらしい憎たらしい絡み。

「何よ、ただのトモダチのくせに」

と小声で言った。確かに言った。

ガタッ

舜は立ちあがった。

お色気作戦計画（仮）（後書き）

どうもです。作者こと甘党でございます。

twitterの宣伝のやつをフォローしてみました。使い方がいまいちわからんですが、頑張ってみたいと思います。

さて、いよいよ直接対決の予感ですね。ミキちゃんの正体もきになりますねえ。あと感想も大募集中です！もれなく作者が喜びます！

w返信の仕方も覚えましてたんで大丈夫です。

それではまた！ ^^

策士リコ。結末は・・・・・・（前書き）

ついに激突した恋のライバル舜とリコ。平穏だった教室は彼女らの戦場となった。祐二を我が物にするためには手段を選ばないリコ。彼女が張っていた策とは？

策士リコ。結末は・・・・・・・・

「ただの友達、ただの友達ってうるさいな！」

ついに舜はキレた。ベランダの野郎共が注目する。

「だってそうでしょ？ 祐二もそう言ってるし」

「そ、それは・・・・・・・・違うの！」

としか言えない。

「まったく調子に乗らないでほしいわ。もうあたしたちは付き合
うの。邪魔はしないでほしいわ」

「えっ？」

（そんな、祐二・・・・・・・・）

「昨日私、言ったのよ？ まあ結果は言うまでもないでしょうね。な
のに高峰さん、カラオケ行く約束なんてしちゃって。全くミキは何
をしているのかしら。まあよくやってくれた方だけど」

ミキという名前が出た。

「ミキ？ どういうこと」

「ああ、やっぱり気づいていないのね？ ミキにはね、あなたが祐
二と会わないようにちよっとお仕事

してもらったのよ。その間あたしたちは楽しく過ごしたってワケ♪」
気がつくともミキが泣きそうな顔で立っていた。

「ミキ・・・・・・・・？」

「ち、違うの！ そういうつもりじゃなかったの！ ほんとね？ 舜ち
やんを応援してたの！ でも・・・・・・・・」

信じることなど出来るわけがない。馴れ馴れしくされてきたこと
に異常に腹が立つ。

「まあどうせ、ただの友達なんだからいいじゃない。せっかく仲良
くなったんだから後は好きにしてくれていいわよ」

と吐き捨てるように言った。ほんとにひどい女だと思った。人を
利用してまで自分の思い通りにことを運ぶ・・・・・・・・悪魔だ。

「そんなわけない。お前なんか……祐二が恋するわけない！」

「あら、現実逃避？」

「んっ！」

殴りかかろうと思った。しかしそこに、

「落ち着けてお前ら」

祐二が現れた。今来たのか傍観してたのかはわからない。

「高峰さんはただの友達でしょ？　なんでウチらの関係に入り込んでくるのよ！」

恋人である祐二にもこの態度である。

「……………」

舜は何も言うことができない。なぜなら本当の祐二の気持ちを知らないからだ。

「ほら、この子ったら何も言えないじゃない。やっぱりダメな子ね。ほんとは祐二くんが好きなんじゃないの」

「言いすぎだリコ！」

さらにリコは続ける。

「高峰さん、ウチたちが付き合うってこといったら、ものすごく怒っちゃうんだもの」

「おい、それはまだ……………」

（やっぱり……………本当なんだ）

殴りかかりたい衝動が引いていく。体の力が抜けていく。

（こんなにも……………なのに）

「高峰さん、あなたはねえ？　お人好しのユージンに適当に相手にされてるだけなのよ？　ね？」

止めの一発だった。涙があふれ出していた。

「ひく……………」

……………

「リコ！　いいか！」

突然、祐二が怒鳴り始めた。クラス全員が、教室に入りかけた教師（原田）までもが注目する。

「いいか！俺はまだ言っていないことがある！何フエチか、好きな食いものは何か！誕生日はいつか！

そんなことよりもっと大事なことだ」

「・・・・・・・・？」

「確かに俺はお人よしだ。人付き合いではいやな顔を見せない用になっているつもりだ。舜にも・・・・・・・・そしてお前にもだ！」

「へっ？何それ？嘘でしょ？」

（・・・・・・・・祐二？）

「確かにお前はカワイイさ、カワイイよ。でもな、すまないがお前を好きにはなれない。なぜならな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

皆が固唾を飲んで次の言葉を待つ。

そして祐二は舜を抱きよせ、

「俺は、俺は舜が好きなんだよ！大好きなんだよ！これがまだ言っ
てなかったことだ！」

舜は顔を上げる。

（・・・・・・・・！！）

教室は大歓声に包まれた。

「よく言った祐二！」

「んにゃろーかけーぜ！」

「とんだ勘違いだったな！リコチャンよお！」

「卑怯なことするからじゃ！」

と、居室奪還に歓喜する避難中の男子一同、

「祐二・・・・・・・・」

涙を拭って舜は呼ぶ。

「悪かったな、あとで何でも、罰は受けてやる」
と祐二。

「くっ！」

とだけ言ってリコは去っていく。

「よし！席着け！」

我がクラスの大勝利に原田も上機嫌である。涙ぐんですらいるように見える。

午後の授業も皆興奮が覚めず。ほとんど授業になっていなかった。

策士リコ。結末は・・・・・・・・（後書き）

余っていたコーヒースュガーを一気食いして友人にかなり驚かれた作者こと甘党です。

幼いころ、ブルガリアヨーグルトについてくるグラニュー糖だけ食べていたこともあるという正に重度の甘党であります。オイシイヨ？その代り代償として、コーヒートか苦いものは一切飲めませんでして、ダ○ドーのブレンドコーヒー？すら飲めません。

早くも将来が心配されております（糖尿病的な意味で）

夜の川土手で（前書き）

リコとの決戦から数週間、舜たちは1年最後の大イベントクラス替えを迎えた。来年も3人仲良く同じクラスになることができるのだろうか。

さらに夜には学校近くの川土手で・・・・・・・・

※一章最終話

夜の川土手で

最近かなり暖かくなってきた。学校の西を流れる川の土手にある桜も少しずつ開花している。

3月下旬、この時期学校では退職転勤する教師を送る離任式がよく行われる。舜の学校もこの日、離任式がある。もちろん世話になった教師がいなくなるわけでもないの、ただただ面倒なだけだ。

しかし、この日は同時に新しい学年のクラス発表があるので大半の生徒は、それ目当てで登校するのである。

「同じクラスになるといいな」

と、上原が言う。しかしそれは舜と上原とではなく、

「だな」

この祐二とである。対リコ戦との決着から早数週間。一応あの日以降、この2人は付き合っているということになっているのだが、当の本人たちは、というと「今までとあまり変わらない」

「はつきり言って実感がない」などと、世間一般のカップルとは少々違う境遇なのだった。上原もなんら気遣いをするわけでもなく、いつものように”ダルイ軍団”を形成し、

「クッソー　なんで春休みのど真ん中にこんな刑務所みたいところに来なきゃなんねーんだよ」

「全くだよ。これでクラス発表がなかったら……」

「死ぬな」

といった調子である。

「で、問題はそのクラス発表か」

「ウチらみんな理系だけど、仲良すぎたし、お荷物だったからバラけるかもね」

「人間関係再構築とか……だりーな」

確かに仲良しグループはバラける、といった傾向は小学校のとき

からもよく言われていたことだった。クラス替え近くになると喧嘩をしてみても仲の悪さを強調させようとしていたやつもいた気がする。「上原って環境の変化をとことん嫌うよね」

「まあな」

といっても、このメンバー皆がそれを嫌っていた。離れてしまうのはやはり嫌なのだ。

「先生方が退場されます。拍手で送りましょう」

離任式は無事終了した。無論3人とも居眠りでやり過ごしている。眠気覚ましという格好で拍手する。

「生徒退場」

司会が言う。

「やれやれ、やっと終わりか」

祐二はわざとらしく伸びをする。

「クラス発表だな、ああゝあ」

と、欠伸しながら上原。教室へ戻る。

ホームルームでは来年度のための書類の移動の説明が行われていた。生徒個票といった重要書類を新クラスに引き継ぐというものだ。1年前に書いた書類を見る。

（いろいろあったよなあ）

高校入学、部活、祐二、上原との出会い、そして何より、

（女の子になっちゃったんだよなあ）

ジジイの仕業でこの事実を知っている物は本人だけである。もちろん誰にも言うつもりはないし、信じてもらえるはずもない。

「じゃあ、新クラスの名簿を配るぞ」

いよいよこの時が来たとばかりに、教室がざわめく。

（どれどれ・・・）

理系クラスは1組から4組で、4組が特進クラスになっている。課外など面倒なことが山ほどあるの

で無論、希望はしなかった。

(・・・! あった)

2組だった。2年2組。これが新しいクラスだ。まあそれはよしとして、

(・・・・祐二)

1組だった。つまり同じクラスではない。舜は祐二を見る。祐二は「残念だったな」という顔でこっちを見ている。しかし、それほど残念な気持ちにはならなかった。なぜならもう自分たちは結ばれているからであろう。

(・・・・上原)

2組だった。つまり同じクラスである。上原の方を見ると「よかった」という顔でこっちを見てる。

しかし、それほど嬉しくなかった。なぜなら、祐二と一緒にいなかったからだ。代わって欲しかった。まあいいか、友達づくりにやっきにならなくてよいのだから。

(リコ・・・・)

4組だった。つまり同じクラスではない、祐二とも自分とも。心底うれしかった。ざまあ見ろと思った。特進だったのが気に食わなかった。

(・・・・ミキ)

2組だった。つまり同じクラスである。例の事件の後、ミキと話をした。リコの策についてだ。話を聞くところ、そのような策は全く知らなかったらしい。リコからは「高峰さんを応援しなさい」という指示があっただけと言う。(リコはかつて仲間外れにされたとき助けられた恩があり、それを弱みに使われているらしい。その助けもライバルを蹴落とすための策だったらしいが、ミキは知らないと聞いている。)彼女に悪気はなかったようなので仲直りするようになった。そして新クラスでは同じクラスに。彼女のことは変なヤツがまわりつかないように守ってあげなくては。

(あとは・・・・)

あまり話したことの無い西野君（男）と和田さん（女）が同じクラスだった。

放課後、部活がなかったので3人でカラオケ、食事等（いわゆる打ち上げ）に行った。1年最後という事でかなり盛り上がった。カラオケでは驚異のペースで通常の3倍も歌い、焼き肉食べ放題では、

リバーズする寸前まで食べた。そして帰宅する頃にはあたりはすっかり暗くなってしまっていた。

3人は学校近くを流れる川の土手に座って、ぼんやりと空を眺めている。

「疲れたな」

「うん」

「ああ」

夜空は満天の星空だった。なんともありがちな風景だが、とても美しい。

「なんか、ずっとこのままでいたい」

舜は言う。本当にそう思う。いつまでもこのバカ3人でバカやっていたい。

「だなあ」

上原は寝そべって腹をさすっている。

「なあに。これからもいつだって遊べるさ」

空気を読まない上原のせいで、祐二との間は上原によって隔てられている。

「やべ、今から塾だ」

上原が立ち上がる。3人の中で唯一塾に通い続けている。「じゃあ」とだけ言って上原が去る。

さて、邪魔者がいなくなった訳で。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

沈黙が続く。未だ上原の跡地の距離は残ったままだ。

・・・・・・・・・・

何分ぐらいたっただろうか。ずいぶん長い時間2人は無言で座っていた。しかし帰ろうとはしない2人ともこの時間が終わってしまうのが惜しかったのだ。

「帰ろうか、祐二」

舜が切り出した。

「ああ、そうだな」

気の抜けた声で祐二が答える。2人は自転車置いてある土手の上に向かって歩き出した。

「手・・・・・・・・繋がない？」

舜は勇気を出して言ってみた。手を差し出して。

「・・・・・・・・」

祐二は無言で差し出された手を握った。

・・・・・・・・

自転車までのほんの十数メートル。短いような長いような距離だった。

「じゃあね、また」

いつもの別れの挨拶。舜は自転車に腰かける。本当に別れが惜しかった。しかしもう別れなければならない。舜はふんぎりをつけて言う。

「じゃあね、また」

いつもの挨拶、そして・・・・・・・・

「んっ・・・・・・・・」

自転車に腰かけると自分の顔の高さにあった祐二の頬、それに向かって唇を一瞬押しつけた。何とも下手くそだった。

舜はすぐさまペダルに足をかけて走り出す。祐二がどんな顔をしているのかは見なくてもわかった。

だから見ない。

ひたすら自転車をこぐ。全力でこいだ。

夜の川土手で（後書き）

どうも、作者こと甘党でございます。

今話をもちまして本作、1章完結でございます。年度終わりということ区切りの良いところです。2章はもっとゆっくりまったりな展開になる予定です。どうぞそちらもよろしく願います^^

新学年と留学生（前書き）

新学年になり2年生となった舜達。しかし早々に問題が発生する。担任は昨年と同じく原田だったり、編入してきた留学生が絡んできたりして・・・・・・

新学年と留学生

4月7日、桜は満開だ。校門付近に植えられた桜はまるでトンネルのようである。その校門は今年、晴れて河原高校に入学する新一年生でごった返していた。各々が真新しい制服に身を包み、夢と希望に満ち溢れた表情をしている。

「初々しいなあ」

「オヤジくさっ」

そんな中、何故か祐二と舜がいる。というのも前担任の原田が名指しで指名したからだ。理由はというと、

「お前らどうせ暇そうだから」

という納得のいかないものであり

「ウチらの二トタイムに暇なんてないっての」

と、春休みは部活以外家を出ないと決めていた舜にとってはいやがらせでしかなかった。

「といっても、サボれば宿題倍増だからなあ」

ペナルティも付いてくるなんともいやらしいなセットなのだ。

「あの、1年2組の15番です」

「へい、鈴木さんね。おめっとさんと」

仕事は受付および花飾りの配布である。

「もう1年経つんだね」

舜は1年前ここであつたことを思い出す。

「だな。お前に会ったのもその日」

「いい出会いではなかったよね。第一声が「トイレどこですか」だったし」

「あん時はマジ焦ったわ」

と、昔話に花を咲かせている2人を大きな影が覆った。

「アー、トイレドコデイスカ」

といったのは身丈190センチはあろうかという男だった。しかも外人だ。

「えっとお……そっちな」

舜はわかりやすくトイレの方向を指さす。

「Thank you」

といって大男は走り去って行った。結構危なかったようだ。

「留学生？」

「だろーな。にしてもかなりイカツイ奴だったな」

祐二がビビるのも無理はない。大柄な体格に加え、真黒な肌、スキンヘッドにぎよろつとした眼は某強暴格闘家を連想させた。

「あんなのが下級生になるのね……」

「ああ、おそろしいな」

結局その後も真面目に仕事をする舜たちであった。

翌日、舜たちは始業式をすませ、新クラスの初顔合わせということで自己紹介付きのホームルームを行っていた。

「えー、担任の原田です。担当は数学、去年と引き続き担任の人もいると思いますが、まあよろしく願います」

早くも舜（および上原）は厄介なクラスになってしまったと感じる。というのも、宿題が多い、授業中寝ることができない、変な絡みがあるという彼らが最も嫌う3要素を兼ね持つというのがこの原田である。

「やってくれるわ」

と、上原は頭を抱えていた。しかし、問題はそれだけではない。

「そして君たちには重大なニュースがあります。今年からうちの学校に編入する生徒がいます」

ざわざわと教室が騒ぎ始める。実は舜の後ろの席は現在人が座っていない。新年度早々休みかと思ったが、どうやら違ふようだ。

「えー、名前はタンバ君と言います。部活動はバスケット部だそうです。おし、入ってこい」

ガラッと勢いよく扉が開く。

「こんにち………（ガコッ）」

なんという出オチ。そいつはいきなり扉のサッシに頭をぶつける。
（ぶつける………デカイ………ってまさか………）

そう、ヤツだった。昨日見た超巨大外人である。というか1年だったはずなのだが。

「アー、ワタシ、アレックス・タンバ、デイス ヨリシク、ネ」

とりあえず日本語は喋れるようだ。片言ではあるが十分である。

「アー、basketballトクイ、basketballclubハイリマス」

なるほど、確かに向いてそうな体格だな。

「よし、じゃあタンバ君は高峰の後ろの席な。高峰、手上げろ」

手を挙げる。まあ彼は自分のことなど知らないものでよしとしよう。そしてタンバはズカズカと歩いてくる。目が合った。

「オオーウ。ウフフ」

とだけ言って座った。

（な、何なのコイツ………）

次の時限、春休みの課題を基にした課題テストたるものが行われている。わけだが、

ツンツン

先ほどから舜は後ろの席から何度も背中をつつかれていた。犯人はというともちろんヤツである。

ツンツン

とてもくすぐったいので舜は「んっ」と身をよじらせる。と、

「オオーウ。so cute フヒヒ」

などと気色悪い声を発している留学生ことタンバである。

（まちがいない！コイツ、ただの変態だ！）

なんともイカツイ風貌であるが、この行動からしてかなりフレンド

リー？な性格のようだ。

ツンツン

(クーツ)

我慢できなくなったのでガタツと椅子を前にずらす。これで一安心、が

「オオウ、ニガサナイ、ヨ」

ガガツと今度は机を前に出すタンバ。今度はうなじを触ってきて・

「ヒーツ！」

思わず声を上げてしまった。

「どうしました？高峰さん」

無論、監督の教師にこう言われるわけで。

「や、野郎っ」

そう言って(すでに舜の中では)変質者を睨みつける。

「オオウ、sorry sorry モウシナイヨ」

申し訳なさそうに謝る変質者。それでよければ警察はいらない。

「タンバ君だっけ？大人しくしていなさい」

と、先生にも釘を刺されたので、とりあえずこの時限は手を出してこなかった。

「大丈夫だった？舜ちゃん」

テスト終了後、ミキが声をかけてきた。ミキはさっきのことを全部見ていたようだ。

「怖いよね・・・あの人。どういうつもりなんだろう」

顔を青くするミキ。かなり心配してくれているようだ。

「わかんない。うん」

本当に何のつもりなのだろう。嫌われているわけではないようだが。ちらっとヤツの方を見る。

「アーウチツ」

ひとりでトランプでピラミッドを作っている。で、今崩れたところ

ろだ。外見のせいもあって、男子もなかなか近付けないようである。
「オウ？」

と不意にこっちを向いたタンバ。

「やべ。目が合った」

「うそ・・・怖いよう、舜ちゃん」

ミキはそういつて身を寄せてきた。そこに、

「アー、ワタシ アヤスイクナイ、ヨ コワクナイ、ヨ」

と、スロー再生の時のような低い声で言うタンバ、いつの間にか横にいる。

「よく言うよ。なんのつもり？」

できるだけこちら側も恐さを出して言う。

「アー、オコラナイデ。ハナシ、キイテクダサイ」

何故か知らないが向こうが泣きそうな顔をしている。「何よ」と返す。

「ダッテ、ダテ。舜ちゃん、カワインダモン」

「は？」

「へ？」

啞然とする舜とミキ。

「Yesterday ワタシ、キミトアッタ ニポンノヒト ア
マリヨクミタコトナイケドウ キミ カワイカタ。ナカユクシタイ、
ヨ」

（えーつまり・・・気に入られたってこと？）

「ホント？」

ミキが聞く。

「イエース。ユルシクネ」

親指を立てるタンバ。

何と言うか、愛らしいやつなんだろう。たぶん。

その後、休み時間一杯、タンバはひとりで母国アメリカについて語っていた。

新学年と留学生（後書き）

どうも、甘党でございます。

春ですねゝ家の近くの桜の花もちよいちよいと咲き始めましたね。

新〇〇とか聞いちゃうといつも「初々しいなあ」って思っちゃいます。

自分も髪形変えたりして気分変えたいですなあ

t w i t t e r I D a m a t o | s a n

ストーカーⅡ企画長（前書き）

アメリカから来た留学生タンバに気に入られてしまい、以後付きま
とわれてしまっている舜。そんなにつくきタンバが出した案が文化
祭で使われることになり、企画長に任命されたタンバは一体どのよ
うな模擬店を開くのか？

ストーリーカーⅡ企画長

河原高校は公立高校とは思えない程の設備が整えられているなかなか珍しい学校として知られている。

この大きな中庭もそのひとつであり、まるで大学のキャンパスにいろように思わせる作りで、多くの木

が緑の葉を茂らせ、花壇には沢山の花が咲き、中央にある桜の木は満開を過ぎ、花びらが散り始めている。手入れがとても大変な庭で、桜が咲くこの季節はいつそう事務員の仕事が増える。そんな中庭はもちろん生徒からも人気があり、多くの生徒が昼休みに訪れ、庭内に置かれたベンチや芝生の上で昼食や昼寝を楽しんでいる。

「楽園だな、ここは」

祐二は木の木陰の芝生の上で寝ころびながら言う。

「学校にいることを忘れさせるからな」

上原も同様大の字で寝ている。ここでこのように過ごすことは1年時からの日課だ。

「しかし、舜チャンは遅せーなあ」

いつも昼休みを共にする3人組の一人、舜はまだ姿を現していない。普段なら彼女が一番にここに来るはずなのである。

「トイレでも言ってんじゃないの」

上原は特に気にはしていないようだ。

「だな。……。お、来たぞ」

祐二が体を起こすと舜が走ってくるのが見えた。

「はぁ……。はぁ……。」

陸上部所属である彼女は珍しく息を切らしていた。まるで何かから逃げきたようだった。

「どうしたよ。お前が昼のランニングなんてらしくないな」

「いや、まあちょっとね」

「ふー」といって倒れこむ舜。まだ冬服の更衣期間のためかなり

汗をかいている。

「タオルあるけど、拭くか？」

首にかけていたタオルを祐二は差し出す。

「あ、ありがとう」

タオルをもらって汗を拭く舜。やけに周りを気にしている。

「なあ、ほんとにどうしたんだ？」

改めて聞く祐二。ストーカー被害にあっているのかもしれないと少し心配になる。

「え？ まあなんてことないよ…… あっ、やばい」

と言ったかと思うと、舜は素早く木の陰に隠れた。その視線の先には、

「ん？ あれって入学式のときの留学生じゃね？」

身長190cmはあろうかという大男がいる。キョロキョロ辺りを見回し何かを探しているようだ。

「同じクラスなんだよ、アイツ」

「で、付きまとわれていると」

「正解」

「はーっ」とため息をつく舜。そしてその留学生は舜を発見したらしくこちらへ向かってくる。

「オーウ、ソコニイマシタカー」

汗だくでやってくる留学生。舜の隣へドスンと座る。

「こっち見ないでよ。気色悪い」

「オホホーウ」

舜の罵声も気にせずタンバは舜の背中をつつく。

「んっ…… だから止めろって言ってんじゃん！」

「オオーウ。デモホントウハシテホシイノデイスネ？」

「なわけない！ あっ……」

今度はふさふさとした羽毛のようなものに覆われたキーホルダーで首筋をくすぐる。

「なんだ、舜チャンは首筋を責められるのに弱いのか？」

「ばかっ！違うから！」

こうは言っているものの、明らかに普通の反応ではない。

「ヤッテミマスか？」

「どれどれ」

さらさら………

と、祐二もふさふさの部分で撫でるようにしてキーホルダーでくすぐってみる。

「やっ………もう、止めろってば！」

我慢できなくなり寝返りを打って逃れる舜。

「はは、面白いな。………どうしたお前」

横を見るとひょっとこのような顔をして目を見開いている外人が1名いる。

「ドウシテデイスカ？ キミニシテモラッタキノハウガ、ウレシソウデイス」

「そうなの？」

唸るタンバに祐二は聞く。

「ワタシガスルトキハイツモコワイカオシテマス。デモイマハウレシソウデシタ」

「祐二にしてもらう方が気持ちいいんじゃないか？」

「この！上原！」

「いてててて」

思いきり舜は上原の耳を引っ張る。

「ったく調子に乗るなつての。で、次の授業は何？」

このように、だいたいは上原が余計なことを言って話が終わる。

加えて昼休みも終わり頃になる。

「数学の後文化祭の打ち合わせだったかな」

「オオー、ブンカサイタノシミデイス」

毎年6月中旬頃、この河原高校では文化祭が行われる。内容は1年生がモニュメント作成、2・3年生は

2学年の売上対抗形式の模擬店を開くのが恒例である。他にもバン

ド演奏をはじめ、パソコン部の制作

したプログラム発表といったものもあり毎年かなりの盛り上がりを見せる。今日のロングホームルームでは、その打ち合わせが行われのだ。

「そーなんだ。じゃあ眠れないじゃん」

しかし彼らは特に楽しみにしているわけではなく、普段通り寝ることだけを考えていた。

「では、開きたい模擬店を挙げていってください」

服装は整い、背も高く、性格もなかなか良いが見た目で少々苦勞している委員長はクラスを見回す。

「ハ―イ」

「ん、タンバ君」

まっ先に手を挙げたのは新加入の外国人留学生ことタンバである。「スシ、スシガイイデイス。ニホンノスシハ、クルクルマワルトキキマシタ」

「なるほど、回転寿司ですね。しかし生ものの販売は許可されていないので却下です」

と、あっさりと切り捨てる委員長。「他には」と続ける。

クレープ、焼きそば、たこ焼き、お好み焼き。などと定番の料理が挙げられていく。多数決で最終決定

をしようとする委員長を担任原田が止める。

「でも、これじゃあ定番すぎて客が入らないと思うなあ。勝ちたいなら別のものにした方がいいぞ」

確かにこの料理は定番すぎてあまり面白みがない。皆納得したよううで、新しい案を出すことになる。

「・・・・・・」

しかしなかなか次の案は出てこない。生ものを封じられたりと制限のために使える料理は少なくなってしまう。「これでもいいんだけどね」と原田も新しい案をあきらめる。

「ゼンブウツタラドウディスカ？」

つぶやくタンバをクラスの全員が見る。

「それだよそれ」

「なんでそんな単純なことに気付かなかったんだ」

結局、タンバの意見が採用されることになった。この模擬店の売りは「食べたいものがみんな売って

いる店」と決まり。店の外観、役割分担等も、かなりの腕のある委員長によってスムーズに決められた。

責任者の委員長を中心に、発案者タンバは企画長、大柄な上原は組み立て班、作業嫌いな舜は資材調達係、料理が得意なミキは料理長になった。

「よし、今日の放課後から準備期間に入るから、運動部もできるだけ参加するように。機材の申請も忘れずに行うこと」

「売り上げトップを目指しましょう！」

「おーっ」

こうして、「河原ファミリーストラン（仮）」と名付けられたプロジェクトは始動した。

ストーリーカーⅡ企画長（後書き）

どうも、大変遅くなってしまいました。お久しぶりです、作者甘党でございます。前回の投稿が今月2日、20日くらい間が空いてしまいました。理由はと言いますと、とにかく忙しかったことです。途中で少し体調も崩し、なかなか執筆に集中と行く訳にもいきませんでした……… といっても、最近はひと段落ついたので、少なくともこれほどに間が開くことはないと思います。では、今後ともよろしく願います！

追記

クラスにいないはずの祐二君が何故か登場していたので、修正しました。また、文化祭日程も修正。5↓6

広がる溝（前書き）

うまくいつているかのように見える2人の仲。しかし別々のクラスになってしまっている以上2人が共に時間を過ごす時間は少なくなっていた。新しい環境は2人の間の溝を少しずつ広げていた。

広がる溝

5月の中旬を過ぎ、暑さを感じる日が多くなった。生徒たちのほとんどが、Yシャツ姿でいるように

なり、白が行き交う校内は以前より明るくなったように感じられる。
(あと5分……)

居眠りから覚め時計を見ると、終業の5分前だった。舜は担当教師の出張で自習になったと聞いて、心おきなく顔を伏せたのだった。
(今日は部活無し……祐二と帰ろ)

最近高校総体に向けた練習で、滅多に休みがなかった。そのため祐二と時間を過ごすことはほとんどなく、加えて祐二も祐二で、新しいクラスメイトと昼食を食べたりすることが増え、日課だった中庭での食事でも無くなっていた。つまりは以前より2人の距離は遠くなっている。

「あー、やつ……と終わった」

逆に最近時間を共にすることが多くなった上原。休み時間はだいたい彼かミキと過ごしている。

「さあ、今日は部活がないからもう帰れるんだよね」

「クッソー、うらやましいぜ」

「今日は祐二と帰ろうかな」

「祐二？あいつ確か誰かと遊びに行くとか言ってたはずなんだが」

「そなの？まあ、ウチは駅までだから来てくれるよ」

祐二の自宅は駅の向こう側、支障はない。

「だな、じゃあ俺は部活へいってくらあ」

重い足取りで歩きだす上原を見送り、舜は靴箱の方へと歩き出した。

一足早く靴箱に着いたので、そこで祐二を待つことにした。

(あ、来た)

階段から祐二が降りてきたのが見えた。何人かの友人も連れてい

る。そのまま向ってきたので、舜は手を振って気付かせようとする。

「……………」

無視された。

（こういうのって恥ずかしいのかな……………）

昇降口で彼女に待っていてもらう。こういった場面を人に見られるのはやはり恥ずかしいのかもしれない。1人になったところに行くのがよさそうだ。

（……………まだ？）

駐輪場で祐二が1人で来るのを待っていたのだが、なかなか来ない。待たれていることがわかってい
るならば、すぐに来るはずである。おそらくそのことに気づいていないのだろう。

（しょうがないなあ）

舜は祐二のクラスの駐輪エリアへ向かう。そこに祐二はいたが、その周りにはまだ友人たちが残っていた。

「祐二、ねえ」

自転車を寄せながら話しかける。しかし、またも無視をされた。

「おい祐二！」

今度こそ無視されないよう背中を突いてみる。さすがに気づいたようだ。

「よお、舜ちゃん」

「ん、一緒に帰ろうよ」

今までと変わらない誘い方。今までと同じ答えに期待する。

「あ、悪い。今日はゲーセン行くから」

「え……………」

「おや、この子が例の子？」

「かわいいじゃん」

舜の存在に気づいた友人たちは彼女に注目する。

「まあそんなとこだ。で、ヤツはまだ来ないのか？」

「さっきはいたんだけどなあ」

まだ1人いない者がいるらしい。しかしそんなことは関係なかった。今、祐二の気持ちは彼女には向けられていない。

「・・・・・・・・じゃあね」

舜は駐輪場を後にした。上原、タンバ、ミキは共に部活。1人だった。部活のある日も帰宅は1人だが今は1人で帰ることに孤独感を感じている。

(ま、そういうこともあるって)

しばらくすればテスト週間になり部活は無くなる。その時誘えばいいのだ。そう思うも孤独感は消えない。真っ赤な夕日が一層それを強くした。

「うふふ、また悩み事のようにねえ」

「げっ、ジジイ。相変わらず勘の良さ」

リコの件といいこういうことに関してはよく首を突っ込んでくる”暫定の”神様。

「自分より友達を優先された。そのことがショックだったのね・・・」

「違うもん」

「全くう。素直じゃないわねえ。顔に出てるのに」

「だけど断り方ってもんがあるでしょ？あんなそっけないなんて・・・」

目も合わせず断る祐二を思い出す。まるで他人のように。

「深く考えすぎよ。あなたは大切にされてるから」

「それが伝わってこないもん。あやしいよ」

完全に機嫌を損ねている舜にジジイはため息をつく。

「ホント、独占欲が強い子ねえ。わがままなだけに見えてきたわ」

「だって恋人だよ？もっと大切にするものだよ」

「はあ・・・・・・・・、かなり重症のようねえ。全く、あなたが女の

子じゃなかったらどうするつり？」

「え？・・・それは・・・」

そう、舜は元々女性なのではない。9割超の時間を男として過ごした身なのだ。仮にそのままだった

として、これほどまで祐二のことを気にしていると・・・・
・なかなか危ない。

「ワタシに感謝しなさいよねっ。あなたを立派なオンナにしてあげたんだから」

「クーツ」

こればかりは反論できない。今の幸せはこの変態ジジイによって与えられたものだ。

「まあ、ようは祐二クンも女の子とイチャイチャしてばかりはいられないってことよ。あなたも祐二クンばかり見てないで、女友達を増やしたらどう？」

「・・・そっか。やっぱり束縛しすぎかな。反省するよ」

「よろしい」

そう笑ってジジイは去ってく。と同時にあたりは明るくなり朝を迎えた。

広がる溝（後書き）

アヴリルが可愛すぎて泣いた。What The Hell
どうも、またまたお久しぶりです。

最近ちよくちよく暑い日があったりしまして夏がくるなあと感じます。

夏と言えばクーラーですよ。そうですね、わが県にある原発が停止しました。つまりは夏に電力不足が懸念されるわけです。ああ、クーラーの無い夏なんて……

と思うわけですがそんなことは言ってられませんね。

雨の日、ついていない日（前書き）

新しい友達を作ってみては？という助言をもらい、早速実行する舜。強い印象を与えようと力が入るあまりぎこちない行動をとってしまう。そんな彼女を見たミキはというと・・・

雨の日、ついていない日

その日は雨だった。梅雨の季節が近づき天気が悪い日が続いていて、そのせいか学校全体が重々しい
雰囲気に使われていた。そんな中でも来る文化祭に向け着々と準備が進められていた。

その日の朝。

「・・・・・・・・だから、そういうことになることは予想できたはず
なんだから、早めに家を出るなりしなければいかな。公共の交通
機関を使うわけだから・・・・・・・・」

「はい・・・・・・・・はい・・・・・・・・そですね」

今日は朝から説教だった。雨の影響で道が混雑し、バスの出発が
5分、到着も5分近く遅れ舜は学校に

遅刻した。雨合羽を着ることを極端に嫌う彼女は事情がない限り雨
の日はバスを利用する。普段なら早めに家が出るが、10あるうち
の9のだるさを感じていたため結局普段と同じ時間に出発したため
遅刻という結果になってしまった。

「はふー」

「朝から災難だな」

「・・・・・・・・」

ふらふらと歩いてきた舜は上原を無視して椅子に座る。

「おい、よっぽど機嫌が悪いみたいだな」

「まあね」

「まあ、今日は授業が最悪だからな」

移動教室が多く、午後の一発目には体育がある。

「ああーっ！」

バンバンと叩く舜。

「おいどうした」

「なんか、もう、悔しくなってきた」

「は、はあ」

「ま、午前の授業は全部寝るわ」
「まじか」

雨はますますひどくなっていた。大きな雨音が聞こえてくる。4
限目の授業は舜を含めてほとんどの
生徒が居眠りをするという何とも学校らしくない風景となった。や
がて終業のチャイムが鳴る。

（昼飯か・・・・・・）

昨晚のジジイの言葉を思い出す。

（新しい友達・・・・・・）

「ミキ・・・・・・」

「なあに？」

「や、たまには女子と食べよっかなあ。みたいな」

新しいクラスに一番よくなじんでいるミキを当てにすることにす
る。彼女は男女両方から割と人気で
友達が多い。

「うん。いいけど、上原君は？」

おそらく一人残されるであろう男を心配するミキ。流石、できた
人間だと思う。

「ああ、いいよ。あんなの。なんとかするよ自分で」

打って変ってなんら気にしないのが舜。しかし仲の良い証でもあ
る。

「はは・・・・・・そうなんだ。じゃ、行こっ」

二人は普段ミキが昼食をとっている教室の右前付近に向かう。そ
の時は既に何人か人が集まっていた

「今日は舜ちゃんも一緒に食べたいんだって。よろしくね」

ミキが切り出す。

「あれ？いつも上原君と食べてる子じゃん」

「彼氏だっけ？」

どうやらこのクラスではそういうことになっているようだ。「ちがうよー」とミキが言う。

(なんか印象に残ること言わなきゃ……………!)

「今日はどうしたの?」

この問いに対して舜はというと、

「あ、あははー。一緒に食べる友達とか居なくってさー! 一人なんだー。はは」

一瞬、場の空気が凍った。

(あれ? 間違えた?)

「あ、えっと! このクラスには居ないってことだね? だからよろしくって!」

「そ、そなんだ……………」

(ありがとう、ミキ。ナイスフォロー)

とはいえ、売り込みに失敗してしまいあまり会話は弾まず昼休みは終了したのだった。

「あまり気にすることないよ。初めてだったし、そのうち仲良くなれるって」

体育の授業へ向かう。雨のため、体育館での授業になった。

「でも、反応うつすかったなあ」

これも自らの社交性の無さか、と思う。そこに、

「だはは、やっぱチチはでかい方が……………」

祐二と階段ですれ違う。気づいていないようだ。彼の周りには数人の男子がおり、一緒にいるという

よりは付きまとっているようにも見える。

「はは、すごいこと言ってたね……………うん」

ミキは苦笑いをする。

「人気者だよな、あいつ。下ネタばかり言うくせに」

舜は口を尖らせて薄っぺらい自分のものを見る。

「あ、あれは一般論だよ! 薄っぺらでもいいところはあるよ!」

「ほんと、いい人だよあんたは」

といってもなかなか豊満な彼女の言葉、説得力に欠ける。

「悔しいなあ、男友達とばっか仲良くして。ウチなんか友達も作れないのに」

「そんなことないよ」

ミキは舜の両手を握った。

「お」

「私、舜ちゃんのこと大好きだよ？無気力なことか、男っぽいところあったりすることか、時々ボケることか、すごく一緒にいて楽しいんだよ？だからさ、自信もってよ」

「な、なんか泣けてきちゃったじゃん。でもありがと」

舜は少しこぼれた涙を拭いた。

「さ、授業遅れちゃうから急ご」

「あいよ」

彼女たちは転ばないように階段を数段飛ばしながら駆け降りた。

雨の日、ついていない日（後書き）

みなさま、どうもです。甘党でございます。

今、新しい友達ができたことによって、大事な人との距離が広がってしまっている、という場面を書いていますが・・・・・・

今思えば、自分も学生時代そんなことがあったなあ、なんて思ったりします。（幾年も前のことですが）しかも恋人なんていう親密な関係でもなかったあの遊び仲間でしたけどね。自分も何とか新しい友達を！と奮起していました。

と、思い出話はこんなところで。

それよりこれから暑くなりますね。もうそのことばかり考えてます。

なんとかしてエコながらも涼しく過ごす方法を考えたいものです。

雨の日、ついていない日2

午後の授業が終わった。まだ雨は降り続けている。舜は雨の中部室へと走る。

「今日は雨だし、文化祭の支度もあるから週末のインハイ予選の支度したら各自準備へ行けってさ。着替えはしなくていいよ」

部室へ行くと先輩がそう言っていた。最後のインターハイに向けて気持ちを高めつつある先輩たちにとっては、雨はいい迷惑だ。

（文化祭の支度か、まだ行っていなかったなあ）

運動部の生徒のほとんどは基本参加できていない。文武両道といって部活動に力を入れている学校の典型的なパターンだ。試合と重なって当日参加できないという何ともかわいそうな部もある。

（行ってみるか）

普段ならあり得ない選択だが、現在の雨の状況からみてかなり帰宅するのは大変そうだ。ずぶ濡れになるし合羽は臭いしでろくなことがない。と判断した結果、クラスのために力を尽くすことにした。

「あー、舜ちゃんだ」

教室へ入るとミキがいち早く駆け寄ってきた。何かの色塗りをしていたようで頬のあたりと手の甲に絵の具が付いている。

「やあ」

「部活は？」

「中止ってとこかな」

「そっかあ、じゃ、早速色塗りやってくれる？」

「それきた」

あまり汚れたくはないのだが、こうも無邪気な笑顔で誘われると断れるにも断れなかった。とても魅力的で作業場にはやはり数人の男子が溜まっていっているのだが、ミキ自体は舜の方に気がいって話をさせる隙がない。

「ここ一緒に塗ろうよ。広くて大変なんだー」

「うん。じゃあ筆貸して」

可愛いやつだなあ、ちくしょう　と思いつつバケツに入っている筆を指さす。

「はいよお、ほれえ」

「あつ、ミキ。この」

筆を持った手が変な方向に伸びてきたと思ったら、頬のあたりに赤く丸を描かれた。

「へへ、おかめさんみたい」

「はあ、もう・・・」

（しかしこうも可愛らしく言われるとなあ）

結局やり返すこともできずただ笑うだけ。そしてミキも笑う。まるでバカップルみたいだ。

塗り続けること数分、

「あ、絵の具切れちゃった」

案の定絵の具は底を尽きた。新しいものを買い出しに行かなければならない。ミキとじつと見つめあう。

「じゃんけん・・・」

「だね」

両者の意見は一致しいざ勝負、

「ハッ」

『とりあえず赤と白と黄色勝ってきてね』

勝負に負けた舜はミキに頼まれた注文を思い出す。学校近くにあるホームセンターへ行くため「学校坂」と呼ばれるならかで長い斜面を下る。坂の入り口にはバス停があり、これを利用する生徒も多い。そんな斜面を彼女は徒歩で下る。

「あー、ついてねー」

今日は朝から運がない。遅刻もしたし、買出しは行かされるし、

歩きだし。自転車で行けば5分もかからないが、歩きでは10分はかかってしまう。おまけに雨も降っている。

「上原にでも行かせればよかった」

ようやく学校坂を下り、学校前を通る道に出た。ここを渡り左へしばらく進めば目的地だ。その方向を見ると、バスが止まっていた。そして右側を向き、道を渡った。

（そのころの祐二）

「おい、早く援護してくれよ！こっちは近接武器なんだから」

「2体同時クエなんだから無理だって。こっちも大変なんだよ」

この男たちには文化祭などもはやどうでもよい物だった。廃材でバリエード兼遮蔽物を設置しハンティングゲームを楽しんでいる。新しいクラスの仲間ともすっかり仲良くなり、毎日ゲーム、トラップなどで時間を潰している。それと引き換え彼女と過ごす時間はだいぶ減ってしまったが、文句を言ってこないし、向こうは向こうでうまくやっているようなので、まあよしとしてしまっている。

「ああ、文化祭っていつだったけ」

「さあ、今週末じゃね」

そろそろゲームにも飽きてきた。何か面白いものはないのだろうか。

「おい、野球しようや」

といってきたのは、いつもつるんでいる仲間の一人だった、即席のバットとボールを持っている。

「おお、いいいな」

「やるか」

立ち上がって階段付近の少し広い場所に移動する。

「……………え？ほんと？」

「見に行こうぜ」

階段のあたりは少し騒がしくなっていた。上の階からは人が駆け下りてきて、下からは駆け上がってくる。主に男子。

「なんかあったんだかな」

「ただ事じゃなさそうな……. そんなような」

そんなことを考えているとこの騒ぎの元凶であろう言葉が耳に入る。

「学校の近くで事故があった」

たしかにそう聞こえた。

「……. おい」

「ああ、わかってる」

そう、考えることはただひとつ、

「現場へ行くぞ！」

言うなり祐二たちは走り出した。階段を駆け下り靴を変える。すでに何人もの野次馬たちがいた。お目当てのものはおそらく同じだ。

「……. ……だつてさ」

「……. ……うちの？」

走っているうちに次々と情報が入る。学校坂の入り口には早くも野次馬共でごった返していた。ふと見ると見慣れた後ろ姿があった。

「お、なんだ舜ちゃんじゃねえか」

買出しだろうか、いや間違はなくこれはただの野次馬だな、と祐二は悟った。しかし振り向いたのは彼女ではなかった。

「……. ……ゆうじくん……. ……」

すごく顔色が悪い。

「どうしよう、ねえ、どうしたらいいんだろう、ぜんぶわたしのせいだよ、ぜんぶ、ぜんぶ」

「おい、どうしたよ」

「やあああ！」

その場にひざから崩れ落ちた。

「おい！なんだ。事故に関わったとか？何があった？」

ミキは声を上げて泣いているだけだ。意味がわからない。自転車でそこらのおばさんでも轢いてしまったのだろうか。いやまて、

「舜ちゃんは？一番こういうのが好きそうなやつが……. ……」

「あああああああつ」

泣き方が激しくなる。ここまでくるともういやな予感しかない。
(ミキの様子、野次馬女の不在)

「ま、まさかなあ」

野次馬の円陣の方を見る。救急隊が担架だけが人を運ぼうとするのが見える。体が勝手に動く。

「どけ、どけての」

野次馬共を掻き分け奥へ進む。やはりそこに彼女はいた。騒ぎの中心として。

「おい、舜！おい！なんか言えよ！」

担架へ突っ込み彼女の肩を揺さぶる。

「落ち着いて！落ち着いて！」

救急隊員にそれを止められる。思考は完全に停止していた。何かなんだかわからない。ひとつだけわかるのが彼女がそこで血まみれで動かなくなっていること。

「くそ！はなせ！」

なんとか彼女へ近づこうとするが救急隊員のブロックは堅い。

「その生徒の担任です！どいてください！」

ぼてぼてと担任の原田が走ってきた。祐二が暴れていることに気づく。

「おいこら、離れろ。後はプロに任せるんだ」

「くっ……嫌だ！」

そうだ、嫌だ。

「俺はこいつの彼氏なんだよ！一緒にいなきやだめなんだよ」

そういえば最近ろくに話もしてやれなかった。いまさらになってそれがどういことだったかということに気づく。

「わかった、じゃあいけ」

原田はすんなりと通した。救急車の扉が閉まり、走り出す。ちらっと見たがミキはうずくまったままで、その横にはタンバと上原がいた気がした。

雨の日、ついていない日2（後書き）

お久しぶりです。甘党でございます。

いやあ、暑いですね^^ さてかなり間が空きました。本当は2週間前くらいには投稿できると思ってたんですが・・・

PCが逝ってしまっています。なんかよくわからないんですが、とにかく起動しなくなってしまいました。もちろん書きかけの原稿もそのなか・・・

結局泣く泣く貯金を崩して新しいのを買いました。そんでいざ投稿！って思ったら静岡で震度5弱、必死で新しいPCをかばいました甘党でした。

恐怖

土曜日、河原高校では予定通り文化祭が開催された。開場から30分ほど経ち校内には他校の生徒、保護者、地元の人たちなど多くの人が続々と入ってくる。校舎内のあちこちで生徒たちが店の勧誘をしている。

(・・・・・・・・)

祐二は中庭の木陰に寝そべっている。元から文化祭で係の仕事などするつもりではなかったが店を歩こうとはしていた。しかし今、共に歩く人間はいない。

「ここにいたか」

寝そべっている祐二の横に上原が腰掛けた。普段から覇気のないやつだが今日はいっそうそう感じられた。と、普段からつるんでいる祐二は感じる。

「無視してくれるなよ」

「はっ、どうだよ調子は」

「だるい」

「いつもと同じじゃないか」

「まあな」

ほんの数日前のことを思い出す。あんなことがあったんだ。自分を取り巻いていた日常が崩れる様をこの目でしっかりと見たんだ。

「ミキちゃんは元気か？」

上原に問う。事故後、彼女はかなりショックを受けていた。同じクラスの連中に聞いたところ、舜を買出しに向かわせたのは彼女だったそう。責任を感じているのは間違いないだろう。

「ああ、まだ学校には来ていないな」

「そか、まあ仕方ないか・・・・・・・・」

そう言って祐二は寝返りを打ち、上原に背を向ける。

「はっ・・・・・・・・」

上原は間抜けなため息をついた。

3日前

祐二は廊下の壁にもたれて座っていた。救急車に乗り、病院に着き、救急隊員と一緒に走り、手術室の前まで来た。なんだか気分が悪くなって床にしゃがみこんだ。送れて担任の原田が到着して、またしばらくすると舜の母親であろう女性が走ってきて原田から説明を受けていた。女性は歩み寄ってきて「舜の彼氏さん？いろいろなありがとね」と言ってきた。そういえば、結構恥ずかしいことをしかもあの原田の前で言ったんだなあと少し恥ずかしくなった。

やがて、手術中という文字が書かれたランプが消えた。まるでドラミみたいだ。ベッドが目の前を通り過ぎ、舜の母親は医師に呼ばれ部屋へと入っていった。

それからかなりの時間がたった。「おい」と原田に呼ばれたので顔を上げる。この出来事だけは残酷すぎて鮮明に記憶している。

「高峰のことだが、聞くか？」

ああ、話は終わっていたのか。でもこの聞かれ方は。

「あまり、よくないんですか」

ため息の後原田は告げる。

「俺も信じたくはないが、今意識がない状態だそうだと、言われた。」

あれからもう3日も経った。だがまだ彼女には一度も顔を合わせではない。あの日ですら彼女の顔を見ることなく病院を去った。怖かった。彼女は、舜は、いったい、いったいどんな姿でいるんだろう。意識不明だ、ちよつと足を折ったくらいの損傷ではないはず

だ。包帯なんかでぐるぐる巻きに去れて、いったい誰だかわからない状態になっているのかも知れない。少なくともいつものようなあの小さくて

可愛い彼女の体ではないだろう。事故現場で彼女を抱き上げたときを思い出す。無理だ、怖い、見たくない、だから逃げた。

「なあ、見舞い、行かないか？」

突然上原は言い出した。祐二ははっとする。

「まだ、俺行っていないし。つか、気になる」

沈黙が流れる。

「怖く、ないのか？」

上原に聞く。こいつはそんな勇気があるのか？

「何が？」

とぼけたように上原は返した。

「だって、意識不明だぞ？あいつが、どんな姿になってるか考えたら……」

「馬鹿だろ」

上原は笑った。

「漫画の読みすぎ、またはブラクラの踏みすぎだな。そんなグロいことになってるわけねーよ」

「おまえ、耐性あるな」

祐二は笑って返した。

「お前本当に男かよ。いいから今日、行くぞ。タンバも連れて行くぞ」

そういつて上原は校舎へと戻っていった。

放課後、祐二、上原、タンバの3人は校門前に集まった。舜のいる病院は学校から数キロの場所にある。

「じゃ、行くか」

上原は珍しく仕切って自転車で走り始めた。坂を下り事故現場、あの悲劇の跡はもう無かった。病院まで10数分かかったが誰も口

をきかなかった。

「高峰舜さんの病室ってどこですか？」

受付の人に尋ねる上原。場所は615号室だそうだ。舜が入院しているのは河原市の総合病院でそれなりの大きさだ。昔祖父が入院していたこともあって中の構造はある程度記憶している。

「ここからは俺が案内するよ」

祐二は前に出て、中央のエレベーターへ向かった。

「オオ、ココダネ」

高峰 舜、という漢字だけはしっかりと読めるらしいタンバ。確認するや否やそのまま中に入っていた。続いて上原も入ろうとする。

「早くこいよ」

祐二は入るのをためらった。ここまで来たが、もう恐怖といったものは感じないが、どうも入る気になれない。そこに、中からもう一人誰か出てきて、

「早くおいでよ。舜ちゃんが待ってるよっ」

と手をつかんで強引に中へと引きずり込んだ。そして、対面した。

「舜……」

すると力が抜けていった。倒れる自分をタンバががっしり受け止める。

そこにいたのは、いつもの舜だった。

「やっぱり舜ちゃんはいつも綺麗だよね」

ミキは微笑んだ。いつもと変わらない暖かい笑顔だ。

「……ケガはどうなんだ？」

上原は聞く。

「右足の脛を折っちゃってるみたい。でも奇跡的に”ケガ”はそれだけ」

「ソナノ、スグナオルデイス」

確かに、折れたのが1箇所だけなんて、奇跡だな。しかし、

「意識がないんだよね……まだ」

祐二は俯いた。

「違うよ」

ミキはキツパリ否定する。

「まだ気を失ってるだけだよ。気絶気絶。すぐ目を覚ますよ!」

「ソーダソーダ」

やけに明るいタンバ、本当は辛いんじゃないのか?

「そんな軽いことじゃ、ないだろ?」

明るくなりかけた空気がまた沈む。

「バカ」

「へ……」

「バカバカ、何でそんな事言うの?らしくないよ……。今舜ちゃんは闘ってるんだよ?頑張ってるのに、1人で辛いのに、一番好きな祐二君がそんな事言ったら、わかるでしょ?」

いつに無く真剣な眼差し。ミキは歩み寄ってきて手を握る。

「お願い、希望を持って。それはきつと舜ちゃんの力になるから」握られた手に涙がこぼれた。

「そうだ、そうだな」

全く俺は今まで何をやってたんだ。情けない。俺の彼女だと堂々宣言しておいてこの様とは。

「うん、そうだそうだ」

ミキは涙を拭き舜のもとへ、椅子へ座り彼女の手を握る。

「ボクモ、ヤリタイデイス」

ミキとは反対側の手をタンバは握る。楽しそうに文化祭の様子などをしゃべり始める。

「そいや、ミキさんは3日間何してたの?」

残念ながら空気と化していた上原が久々に喋る。

「あ、ごめんね、心配かけちゃったかな」

「元氣そうだから良かったけど……」

「ああ、かなりショックだったみたいだったからな」

祐二も口を挟む。

「うん、事故の翌日は部屋に籠ってただけだね、でもさっき言っ
たみたいに周りのみんなで元気づけなきゃって思っ
て、次の日から
毎日きてるんだ」

本当に驚かせられる、彼女には。これは計算でもなんでもなく素
の行動だもんな……。

「そっか、でもちゃんと学校には行けよ？来週から」

「うん、そうする。舜ちゃんのお母さんにも怒られちゃった」

といいつつも残念そうに見えるミキ。普段でも一緒に居たがるの
に、こんな状況ならなおさらだ。しかし、一体何故ここまで、とい
う疑問も沸いてくる。

（まあ、今度聞いてみるか）

そんなことを考えながら、持ってきた花を花瓶に移した。

恐怖（後書き）

とうとうとうるゝん。甘党だよ。

はい、実は先日、アニメ版シユタインズゲートを見ました。なかなか良い作品と聞いていたシユタゲとあの花で迷っていましたが、「なんかシリアスっぽい！」という自分好みの判断でシユタゲにしました。そして予想通り終盤は重い展開に……。しかし面白いので、全く内容には関係ないけど、

ルカ子と助手が可愛すぎて泣いた　そして結婚してくれ

はい。すみません。

これってもともとはゲームだったんですね。見た後に知りました。ゲームのほうがラストが感動的らしいのでこっちも機会があれば、と。（初見でやりたかったあああああうあああああ）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4282r/>

俺は女の子になったようです

2011年9月23日03時14分発行